関西学院考古

No. 5

1979. 3

関西学院大学考古学研究会

関西学院考古　No. 5

目　次

調査報告

長尾山の古墳群(Ⅱ) —— 雲雀丘古墳群 …… 関西学院大学考古学研究会 …… 1

Ⅰ　雲雀丘古墳群の概要

(1) はじめに …… 1

(2) 研究史 …… 1

(3) 位置 …… 2

(4) 調査の経過 …… 5

Ⅱ　雲雀丘古墳群C北群の調査結果

(1) 位置と現状 …… 5

(2) 雲雀丘古墳群C北群3号墳 …… 6

(3) 雲雀丘古墳群C北群4号墳 …… 7

(4) 雲雀丘古墳群C北群6号墳 …… 8

Ⅲ　まとめと今後の課題

(1) 分布状況 …… 10

(2) 形成過程 …… 10

(3) 立地条件 …… 11

(4) 長尾山の古墳群と雲雀丘古墳群の性格 …… 12

資料紹介

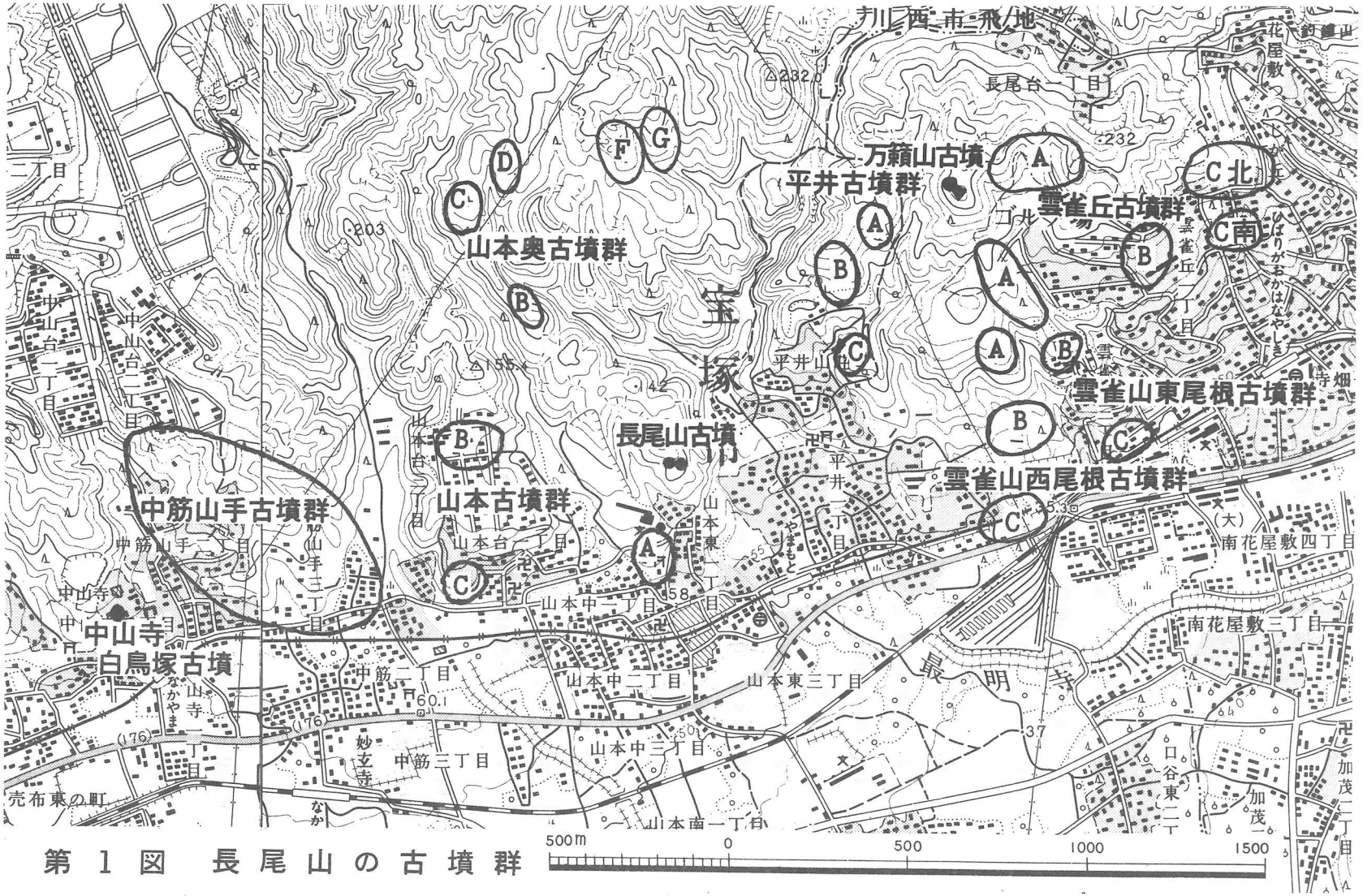
西宮市獅子ケ口の須恵器 …… 関西学院大学考古学研究会 …… 17

関西学院構内採集の須恵器 …… 関西学院大学考古学研究会 …… 20

雲雀丘学園所蔵の長頸壷 …… 坂井秀弥 …… 22

研究ノート

猪名県と畿内の県 …… 岡田　務 …… 24


万籟山古墳
平井古墳群
雲雀丘古墳群
雲雀山東尾根古墳群
雲雀山西尾根古墳群
山本奥古墳群
山本古墳群
長尾山古墳
中筋山手古墳群
中山寺
白鳥塚古墳
宝塚
平井山
山本台一丁目
山本中一丁目
山本中二丁目
山本中三丁目
山本東三丁目
中筋一丁目
中筋三丁目
南花屋敷四丁目
南花屋敷三丁目
長尾台一丁目
最明寺
500m
0
500
1000
1500

第１図　長尾山の古墳群

調 査 報 告

長尾山の古墳群(Ⅲ)

――雲雀丘古墳群――

関西学院大学考古学研究会

Ⅰ　雲雀丘古墳群の概要

(1)　はじめに

関西学院大学考古学研究会は、研究活動の対象地域をこれまで西摂地方に求め、特にこの地域に現存する後期古墳の解明に傾注してきた。そして、現在西摂平野北方に展開する長尾山の古墳群の調査・研究を押し進めている。まず、昨年度の「長尾山の古墳群Ⅰ－中筋山手古墳群－」(『関西学院考古』第4号昭和53年)においては、長尾山の古墳群解明の第一歩として丘陵の最西端に位置する中筋山手古墳群についての調査報告を行なった。そして今回も、この趣旨に基づいた研究活動の一環として雲雀丘(ひばりがおか)古墳群に注目し、その研究報告を行なうこととした。

長尾山の古墳群に関する当研究会の研究・調査は、長尾山の古墳群全体が考察対象である。つまり、それは当古墳群の正確な分布状況の把握、群構成の検討、名称の統一、個々の古墳群ごとの形成過程および性格解明であり、そして究極的には長尾山の古墳群という全体像の統一的な把握、解明が目的である。

近年、長尾山丘陵は宅地開発が急速に進行し、古墳の現存確認においてさえも困難である。当丘陵東端に位置する雲雀丘古墳群においてもこの傾向は特に顕著であり、後述するようにすでに2つの支群が消滅し現存が確認されている古墳は2つの支群のみである。しかも、当古墳群における本格的な発掘調査としてこれまでに記録されているのはC南群だけであり、この点、長尾山の古墳群の中でもその研究が遅滞している古墳群の一つと言える。

以上の実情から、当研究会は一貫した長尾山の古墳群研究の一過程として雲雀丘古墳群を取上げ、その現状を把握し、若干の考察を述べることとする。

(2)　研　究　史

長尾山の古墳群に関する調査・研究は、現在まで数多く実施・報告されてきており、個別的ではあるが徐々にその全体像が解明されつつある。ここでは、特に雲雀丘古墳群を対象とする調査・研究を述べ、以下列記することとする。

① 昭和29年、武藤誠・村川行弘氏らによるC南群の発掘調査。

これは、雲雀丘一丁目附近の宅地造成に伴う緊急発掘調査であり、当時確認された8基の古墳のう

ち３基について発掘調査がなされた。『宝塚市史』第４巻に収録。

② 石野博信氏 「宝塚市長尾山古墳群」(『宝塚市文化財調査報告第１集』昭和４６年)。

昭和３４年、石野博信氏は長尾山丘陵全域にわたる分布調査を実施するとともにこの後期古墳の群構成ならびに呼称法について新たな考察を加えた。

氏の分布調査の結果、雲雀丘支群においては、A小支群５基(雲雀丘ゴルフ場附近)B小支群４基(精常園附近)C小支群５基(雲雀丘)の計１４基の古墳が確認されている。

③ 兵庫県教育委員会編 『兵庫県遺跡地名表』 昭和４０年

是川長氏らによる分布調査であり、当周辺地域においては切畑群集墳として１８基の古墳が確認された。

④ 武藤誠・橋本久他 「雲雀丘古墳群」(『宝塚市史』第４巻 昭和５２年)

⑤ 関西学院大学考古学研究会 雲雀丘古墳群C北支群１号墳実測調査 (「長尾山の古墳群Ⅰ」附載『関西学院考古』４号 昭和５２年)

⑥ 宝塚市教育委員会 雲雀丘古墳群B群１号墳発掘調査 昭和５３年

なお、長尾山の古墳群に関する名称は報告がなされるたびに別個の名称が使用されてきた。雲雀丘古墳群においても現在のところ、石野氏の報告、『兵庫県遺跡地名表』、あるいは近年編集された『宝塚市史』と三者三様の呼び方をしている。以下はこれらの呼称法の比較一覧表である。『兵庫県遺跡地名表』を別にすると、石野氏の報告と『宝塚市史』はほぼ一致している。ただ、石野氏のB小支群を、さらに南北に二分しているが、本書では、今後の混乱を避けるため一応『宝塚市史』の呼称法に準拠する。

第１表 『市史』の呼称法を基準とする当古墳群の名称比較

	宝塚市史	石野博信	兵庫県遺跡地名表
群構成	長尾山の古墳群	長尾山古墳群	
	雲雀丘古墳群	雲雀丘古墳群	
	・A群 ・B群 ・C南群 ・C北群	・A小支群 ・C小支群 ・B小支群	切畑群集墳

(3) 位 置(第１図、第２図)

長尾山の古墳群は西摂平野の北方に展開する広範な長尾山丘陵に存在する。この東西約8Kmにわたる丘

陵全域に展開する古墳群を総括して長尾山の古墳群と呼び、東から雲雀丘古墳群・雲雀山東尾根古墳群・雲雀山西尾根古墳群・平井古墳群・山本古墳群・山本奥古墳群・中筋山手古墳群・中山寺白鳥塚古墳の1独立墳と7古墳群によって構成されている。現在、約１５０基の後期・終末期の古墳が確認されている。

雲雀丘古墳群は長尾山の古墳群中、最東端に位置するものである。分布範囲は万籟山から東にのびる大尾根の南斜面あるいはそこから派生する尾根上、標高約90m～200m にわたる東西に幅広い地域である。

当古墳群は4つの群に分けられている。

〈A　群〉

万籟山古墳の東側尾根、標高１９０m～２００mに分布している群であり、石野氏の記録によれば5基確認されている。現在のゴルフ場附近にあたり、その建設に伴う開発工事の為、古墳は全て破壊された。

〈B　群〉

雲雀丘一丁目・二丁目にあたる標高１２０m附近の南斜面に分布している群である。石野氏の報告から、当時少なくとも4基の横穴式石室を有する古墳が存在していたことが判明している。現在、宅地造成、住宅建設によってこの附近は全く旧状をとどめておらず、現存する古墳は昭和５３年7月発掘調査が行なわれたB－1号墳だけである。なお、この古墳が石野氏の4基に含まれるかは不明である。

〈C南群〉

C南群は、雲雀丘一丁目の東部地区、現在の住宅地域内で確認されていた群であり、標高１００m附近に立地していた。

当群は、昭和２９年緊急発掘調査が行なわれた（研究史①、第4表参照）。しかし、その後の宅地造成によってこれらの古墳は全て破壊されている。

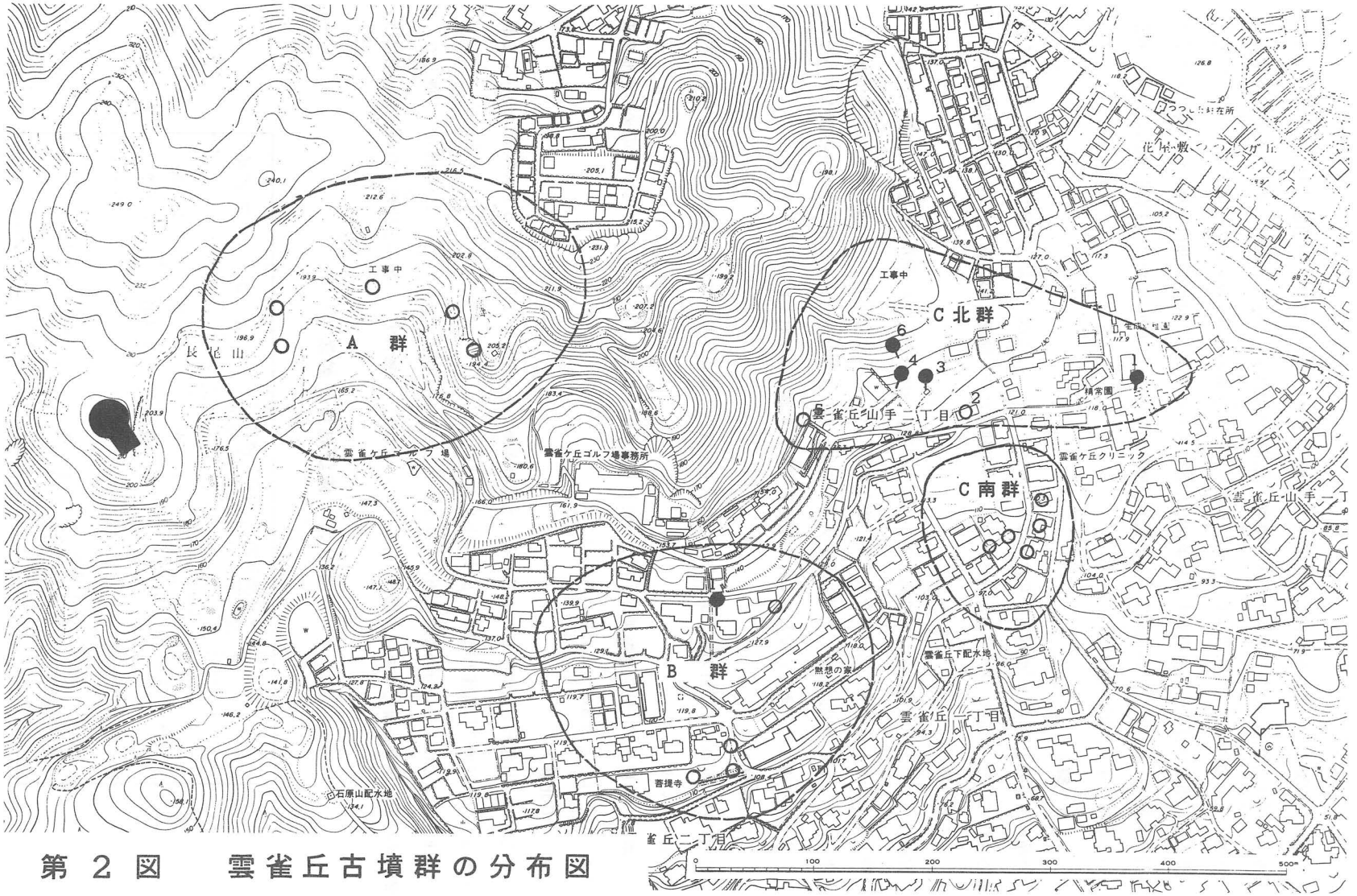
〈C北群〉

C北群は、旧地形を比較的とどめている、尾根の南緩斜面、標高１２０m～１５０m附近に現存する群である。行政区画では雲雀丘山手二丁目にあたる。

当研究会はこれまでの分布調査の報告を踏まえた上で、C北群の全域にわたって分布調査を実施した。踏査の結果、現存が確認できた古墳は4基であり、これを『宝塚市史』の報告と比較すれば、2号墳は住

第２表　確認結果比較表

	確認済みの現存墳	新たに確認された現存墳	消滅墳	未確認墳
宝塚市史	3基 1号墳 3号墳 4号墳	1基 （6号墳）	1基 （2号墳）	1基 （5号墳）
兵庫県遺跡地名表	3基 1号墳 2号墳 3号墳	1基	15基	



第 2 図　雲雀丘古墳群の分布図

宅造成のため地下に埋没、3・4号墳は現存確認、5号墳は未確認、この他に新たに一基を確認したことになる。5号墳は古墳でない可能性があるが、一応重複を避けるため、新たに確認した古墳を6号墳とする。なお、『兵庫県遺跡地名表』においては、既述したようにA群と一括して切畑群集墳とし18基の古墳の存在が報告されている。

今回の確認結果を『宝塚市史』および『兵庫県遺跡地名表』の記載と比較すれば第2表のとおりである。

(4) 調査の経過

当研究会は分布調査を終了した後、現存する古墳の実測調査を実施した。調査対象古墳は3号墳・4号墳・6号墳の3基であるが、6号墳に関しては墳丘実測のみにとどめた。調査の経過は以下のとおりである。(衣川)

3号墳実測調査　昭和53年5月13日・14日・21日・27日

4号墳実測調査　6月10日・17日・18日・21日・22日

6号墳実測調査　10月7日・8日・14日・15日・11月2日

Ⅱ 雲雀丘C北群の調査結果

(1) 位置と現状

今回の調査対象地域は、雲雀丘古墳群の中で最も東部にあたるC支群である。現在C北群には4基の古墳が遺存しており、今回はC北群1号墳を除く3号墳・4号墳・6号墳について調査を行った。

3号墳・4号墳・6号墳は、雲雀丘山手二丁目に所在する。3基の古墳の立地する尾根は、当地域の西部を南北に延びる主尾根から分岐して東西に走る小尾根で、南に傾斜して低くなりC南群の緩斜面へと向う。この尾根は、その東尾根筋を宅地造成のために大きく削られているが、古墳のある南傾斜面は、比較的その旧状をとどめている。3基の古墳はこの南傾斜面の標高135m～155mにかけて隣接して築造されている。3基の古墳の南部は削られて谷となっている。この谷の上を、3号墳から4号墳の墳丘裾部を通り、6号墳へと道が造られており、また自然地形を利用した山道が、4号墳の裾を取り巻くように走っている。

3号墳は3基の古墳の中では最も東部、標高137mに現存する。現在その南東部を宅地造成のために大きく削平され平担面となっている。そのため墳丘はほとんど残されてはいない。石室内は以前、祭壇として祭られていた形跡がある。床面・奥壁・両側壁ともにすべてコンクリート舗装が施され、天井石は一部露出しており、一部が抜きとられている。また羨道部では両側壁に沿うように石垣が造られ、東部の平担面に向って階段が設けられている。

4号墳は3号墳の西約20m、標高141mにあり3基の古墳のほぼ中央に位置する。墳丘はその旧状

をよく保っており、南東部においては、山の傾斜面を削り墳丘とした様子がはっきりと認められる。石室内は現在落石が多く特に左側壁のいたみがひどく、非常に危険である。また天井石と羨道部の一部が露出している。

6号墳は3基の中で最も西部にあり、4号墳の西約２５ｍ、標高も１５０ｍと3基の中で最も高い所に位置する。墳丘は南東部において削平されて平坦面となり、古い人家が残っている。従って6号墳は墳丘の規模・旧状が大変把握しにくい。また石室が頂上部と羨道部で露出し、石室内には土砂が流入している。

（岡島・高田）

(2)　雲雀丘古墳群C北群3号墳（図版１・２・４・５）

〈墳　丘〉

東側は全くの損壊状態である。また西側の地形も相当変化しており旧状を保っているとは言い難い。わずかながらも旧状を保っているのは玄室部あたりと、その北方部の小径のあたりまでである。墳丘規模は、径約１５ｍ～１６ｍ、高さ約3.5ｍの円墳である。

〈石　室〉

石室は主軸をほぼ正南北にとり、南に開口する両袖式の横穴式石室である。

石室規模は、石室現存長約9ｍ、玄室長約3.8ｍ、羨道現存長約5.2ｍ、玄室幅は、奥壁部約1.4ｍ、中央部約1.7ｍ、袖部幅約1.7ｍあり、入口に向って緩く開いている。羨道幅は、玄門部約1.2ｍ、中央部約1.1ｍ、羨門部約1.0ｍを測る。玄室高は、奥壁部約2.6ｍ、中央部約2.8ｍ、羨道高は、玄門部約1.7ｍ、羨門部約1.6ｍを測り、玄室高と羨道高の段差は、天井石崩落のため確認できないが、推定0.8～0.9ｍであろう。

玄室部天井石は2枚確認できるが約1ｍ×1ｍほどの石を使用している。

側壁は両側とも1段目に1.5ｍ×0.6～0.7ｍの石を横積みし、2段目の石を小口積みにしている。2段目からの石は1段目の石と比して総じて大きくない。奥壁は1.5ｍ×0.7～0.8ｍの石を設置し、その上に側壁と同様に石を横積みしている。持ち送りは両側壁で4段目より確認できる。

床面は、基底部の石の露出状態からみて、旧状に近いと推定できる。ただ、入口附近に向って傾斜しているので、この部分の床面レベルは高くなろう。

石材はすべて花崗岩である。

以上のように、当墳は墳丘の地形変化の他、石室内部は、ほぼ旧状を保っている。

〈小　結〉

雲雀丘古墳群C北群3号墳は、標高約１３７ｍに位置し、両袖式の横穴式石室を有する径約１５ｍ～１６ｍ、高さ3.5ｍの円墳である。築造年代は、石室規模、石室の築造法からみて、6世紀後半頃と比定できよう。（高田）

(3)　雲雀丘古墳群C北群4号墳（図版1・3・6・7・8）

〈墳　丘〉

当墳はC北群3号墳と西側で接して築造されている。墳丘の南側および北側の裾部は、山路のために少し削平されているものと思われる。墳頂の封土は少し流出して天井石の東半分が露見する。しかし、全体的にはほぼ旧状を保つものと考えられる。

墳頂は現在、標高144.75mであり、基底部は北で約143m、南で約141mを測る。したがって、この墳丘は、径約15m、高さ約3mの円墳であると思われる。

墳丘の南側の裾から石室の入口に続く落ちこみは、主軸の位置より少しはずれるところから、羨道部の痕跡ではなく人為的に掘られた通路であると考えられる。

また、墳丘は巧みに旧地形を利用しているため、南東方向より墳丘を望むと実際の規模より大きく見えるが、この視覚的効果は、墳丘築造当時に意識されたものであろう。

〈石　室〉

当墳の石室は、主軸をN－23°－Eにとり、南々西に開口する右片袖式の横穴式石室である。

石室の規模は、現存長3.81m、玄室長3.31m、玄室幅は奥壁部で2.45m、袖部で2.25mを測り、玄室幅指数は74で、玄室の平面形は方形に近いプランを持つ。羨道部では、玄門幅が1.05mであり、残存する羨道部はほとんど確認されていない。ちなみに羨道幅指数は49である。玄室の高さは、現状床面から1.8mを測り、床面には排水溝が確認されている。この排水溝は、奥壁側で20cm、側壁沿いでは15cmであるが、これは袖部附近では確認されていない。現状の玄室床面は、排水溝の状況からすれば石室が築造された当時のレベルに近いものと思われる。また、羨道部のレベルが高くなるのは、流入土の堆積であろう。

石室に用いられた石材は花崗岩で、風化の著しい石材も散見される。石室の構築は玄室部で4段積みを基本とし、その上に天井石を玄室部で5枚、羨道部では1枚を架構する。側壁では1段目から2段目に比較的小さな石材を横積みしているのに対し、3段目から4段目にはやや大きな石材が用いられている。奥壁においては比較的規格性のある角ばった石材が使用されているが、3段目は小規模な石材が不規則に横積みされ、間隙を拳大の石で詰めている。袖部においては比較的規模の大きい石材4枚を横積みし、その上に人頭大の角ばった栗石を入れ、天井石を架構する。

現状では、側壁の石材が西から東に向って崩れかけて歪んでいるが、これは石の積み方が横積みを主として行なっていること、古墳が小さな鞍部上に築造されて南に急傾斜することによるのであろう。したがって、石室築造当時は、東西両側壁側にかなりの持ち送りがあったものと思われる。

なお、墳丘の南東側に1.3m×0.6m程度の花崗岩が確認されるが、おそらくこの石材は、当古墳の羨道部の天井石に用いられていたものであろう。

〈小　結〉

当古墳は、西摂地方では珍しく方形に近いプランをもつ古墳であり、標高約141mに築かれた高さ約3m、径約15mの円墳である。

石室築造当時の全長は不明な点が多いが、奥壁から墳丘の裾までは約１１ｍを測る。しかし、石室の形態から考えると、これをそのまま石室長とは考えられなく、もっと短くなるだろう。

築造年代は、石室形態などから、６世紀前半から中葉頃に比定されよう。（中野）

(4)　雲雀丘古墳群Ｃ北群６号墳（図版１・８）

〈墳　丘〉

６号墳は西から東へ延びる尾根の南傾斜面に築造されている。墳丘は現在南東部において削平を受け平担面となっており、廃屋と石積みに囲まれた泉水が残されている。この削平にともなって石室羨道部が破壊され露出しており、玄室の天井部も一部露出している。また墳丘南部においては２段の崖があり、２つの平担面を形成している。これも人家造成のための削平によるものと考えられる。

このように墳丘は基底部南東部で削平・削除などによって大きな改変がみられ、旧状を保っているとは言いがたい。

墳丘の規模は、旧状をよく保っていると思われる北東部に墳丘の基底部らしい谷の残っていること、それが旧状にほぼ近いと考えられることから、径１０ｍ高さ３ｍの円墳であったと推定できる。現在の墳頂は１５２ｍであるがこれは旧状に近いものであろう。

〈石　室〉

石室内には現在土砂が流入しているが、袖をもつ横穴式石室で玄室規模は幅約1.5ｍ長さは３ｍ～４ｍである。

〈小　結〉

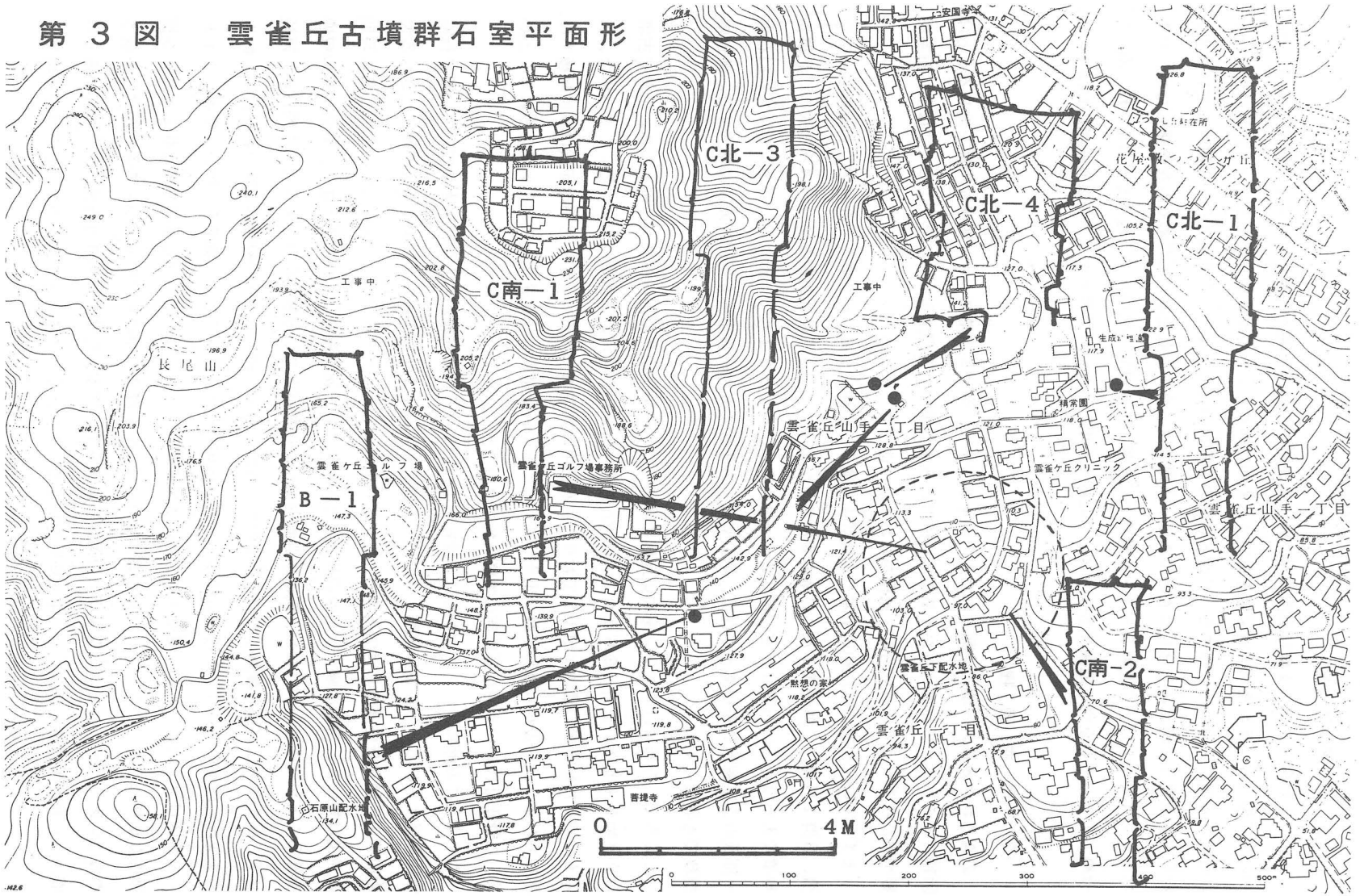
６号墳は東西に延びる尾根の標高約１５０ｍ附近に位置し、横穴式石室を有する径１０ｍ高さ３ｍの円墳であったと推定できる。

築造された時期は石室の形態・大きさ、墳丘の規模から考えて６世紀の後半に推定できる。（岡島）

Ⅲ　まとめと今後の課題

以上雲雀丘古墳群Ｃ北群の３・４・６号墳の３基について調査したところを記してきた。すでに「Ⅰ．雲雀丘古墳群の概要」で述べたように雲雀丘古墳群ではほかにＢ群１号墳[①]、Ｃ南群１・２・３号墳、Ｃ北群１号墳の計５基が調査されている。Ａ群はかって５基が確認されたのみで現在は全く不明である。ここでは従来の調査と今回の調査結果から、長尾山の古墳群のなかで雲雀丘古墳群がいかなる位置を占めるのか若干の考察を試みたい。

第３図　雲雀丘古墳群石室平面形



(1) 分布状況

A・B・C南・C北の4群は東西約800m、南北約500mの範囲にわたり分布する。標高では100~200mの間に相当し、それぞれ摂西平野を眺望する斜面に築かれているが、同一尾根上でなく丘陵の大小複雑に分岐する尾根に分れて分布する。C南とC北の2群は前述したように石野氏が一つの群としていたものを『宝塚市史』で南北に二分したものである。本書では名称の混乱を避けるためこれを踏襲したが、分布状況からするならば、C北群2～4・6号墳とC南群の古墳は同一尾根上に立地すると考えられ、南北で分離してそれぞれを別に把握するよりは、C北群1号墳のみを分けて考えたほうがより妥当ではなかろうか。

(2) 形成過程

調査された8基の古墳で発掘されたものが4基であり、個々の古墳について明確な時期を論じることは困難である。まして発掘された4基でもC南群の3基は遺物の実測図がない。そこでここでは主に石室形態や築造法をたよりに形成時期・過程をおおまかに辿るにとどめる。

まず石室の平面形では片袖式1基(C北群4号墳)、両袖式5基(C北群1・3号墳、C南群1・2号墳、B群1号墳)、無袖式1基(C南群3号墳)がある。このうち最も問題を含むのは片袖式のC北群4号墳であろう。この石室は玄室の幅2.25～2.45m、長さ3.81mで方形に近いプランを示す。白石太一郎氏の玄室幅指数を根拠とすれば、第Ⅰ型式(実年代で5世紀後半～6世紀初頭)に該当する[②]。羨道幅指数でも同様である。

ところで、方形に近いプランを周辺地域に求めると、芦屋市山芦屋古墳[③]が唯一の例となる。山芦屋古墳は玄室幅3.15m、玄室長3.60mで、ほぼ正方形に近く巨石を用いて構築されている。ここの場合、古いもので6世紀後半の遺物が出土しており、巨石使用の大型墳であることからも築造年代は6世紀後半に求められよう。周辺から竈形土器が出土していること[④]や、文献から帰化系氏族の存在が考えられることから、水野正好氏のいう帰化系氏族の墳墓[⑤]と想定されよう。

このように方形に近いプランからは5世紀後半ないしは6世紀初頭から6世紀後半までの広い幅で石室年代を捉えられる。しかしC北群4号墳は玄室高がわずか1.8mにすぎなく、第Ⅰ型式の標式とされる大阪府芝山古墳や奈良県椿井宮山古墳のように天井が高く、かつドーム形になっていない。また、この時期の羨道は短いが、当墳の場合、土砂の流入により現状で0.5mを確認しえたにとどまり、築造当初の規模を知ることができない。ただし、羨道部西側壁は土砂に埋没している基底部はともかく、玄門石から連続せず、長くても玄室長を凌駕しないのではなかろうか。いずれにしろ、6世紀後半以降の石室にみられるような長い羨道を有しないと考えられる。一方、石室の石材は巨石でなく、奥壁も一枚石を使用しようとした意図は全く認められなく側壁と同一の技法で構築している。さらには帰化系の墳墓と想定せしめる積極的な根拠に乏しい。こうした点を考慮するならば、C北群4号墳は6世紀前半から中葉にかけて築造されたといえるだろう。なお『宝塚市史』第四巻の図57、雲雀丘古墳群C南群分布図に示されている6号墳は、C北群4号墳に類似した石室平面形を呈する。発掘によって確認されたものなのかどうか不明であ

るが、両者が近接していることよりあるいは同様の石室形態である可能性が考えられる。いずれにしろC北群4号墳は雲雀丘古墳群、ひいては長尾山の古墳群でも最も先行して築造されたといえよう。

これに続く段階としてC南群1号墳があげられる。当墳は両袖式であるが、玄室の長さが幅の約2倍で、狭長なプランと比較して古い要素をもつ。6世紀中葉から後半頃と推定される。

狭長な両袖式石室にはC北群1・3号墳、C南群2号墳、B群1号墳が含まれる。B群1号墳は出土遺物から6世紀後半に比定され、ほかの3基についても並行する時期が考えられる。ただ、C南群2号墳は袖が強くは意識されていなく若干時期的に下るかもしれない。

最も新しい段階に該当するのは無袖の小型横穴式石室をもつC南群3号墳である。この型式は長尾山の古墳群で普遍的にみられる7世紀前半の石室形態である。これらの多くは同一時期のものばかり群集する傾向があるが、他時期の古墳と混在する群としては、ほかに雲雀山西尾根古墳群B群（1号墳）、中筋山手西古墳群（5号墳）の例を指摘できる。

以上述べてきた形成の諸段階を整理すると、

① 6C前～中　C北群4号墳、（C南群6号墳）
② 6C中～後　C南群1号墳
③ 6C後～末　C北群1・3号墳、C南群2号墳、B群1号墳
④ 7C前　C南群3号墳

となる。

A群については資料を全く欠くため論及できないが、石野氏の分布図に「小石室」と記されていないことからすれば、少くとも6世紀後半代には造墓されていたと思われる。

(3) 立地条件

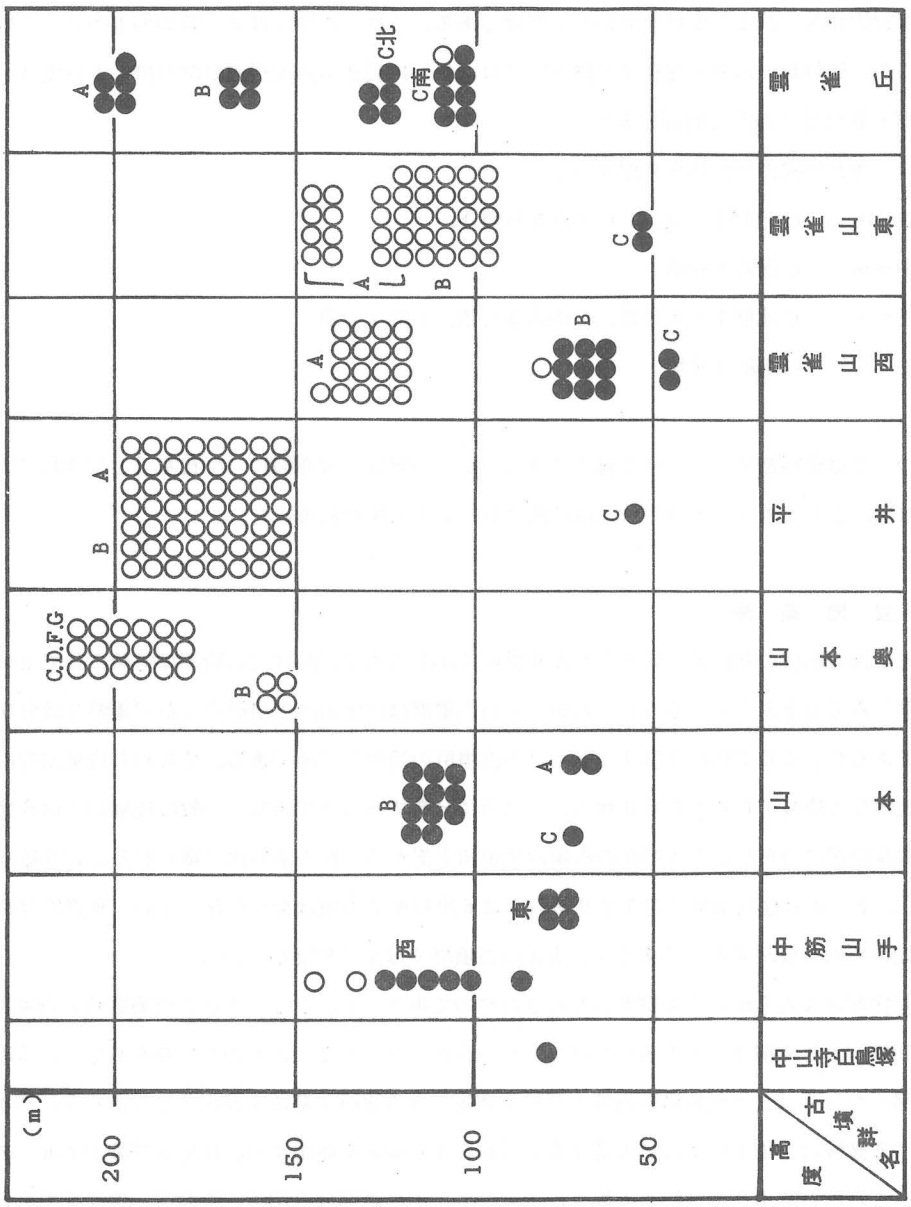
雲雀丘古墳群の形成の初段階と考えられる6世紀前半から中葉にかけての時期は同時に長尾山の古墳群全体の濫觴とみて差支えないだろう。したがって当古墳群は長尾山の古墳群のなかで重要な地位を占めてくるわけであるが、ここで特に注目すべき点は当古墳群の特異な立地である。すなわち長尾山の古墳群の諸古墳と比較して標高100～200mという高所に分布することである。一般に長尾山では6世紀代の古墳は尾根突端部に分布し、7世紀代の古墳は尾根頂上部からそれの南斜面に築かれるという傾向を示す（第3表）。とりわけ他古墳群では120m以上に6世紀型の古墳は全く存在しない。垂直的な高低がそのまま時期の新旧を反映するのであるが、雲雀山古墳群では全く相反している。

こうした状況はなんらかの社会情勢に左右されたのであろうが、ひとつには古墳築造時の石室用材の確保という問題が大きく関連してくるのではないだろうか。ひとたび、人々が石で墓を造るという現実的行為にたち帰ったならば、当然容易に古墳の石材を調達できる場所に墓域を設定するであろう。雲雀丘古墳群の立地する地域は古墳用材には最も適すると思われる花崗岩を産出する、長尾山丘陵でも唯一の地域なのである。[6] これは石切山花崗閃緑岩と称されるもので、その範囲は石切山、満願寺、雲雀丘の地域に限定

され、雲雀山東尾根古墳群の立地する尾根の東側の谷以西には全くみえない（第４図）。このような事情から、雲雀丘に早い時期から盛んに古墳が造営されたといえよう。長尾山で６世紀代に造墓を開始するのは中筋山手西・東、山本Ａ・Ｂ・Ｃ、平井Ｃ、雲雀山西尾根Ｂ・Ｃ、雲雀山東尾根Ｃの各群であるが、雲雀丘古墳群の占める比重が大きいのは、この石材確保という観点から看取できるのではなかろうか。

(4)　長尾山の古墳群と雲雀丘古墳群の性格

最後に、前述した形成過程、立地条件等の問題を含めて、長尾山の古墳群という大きな視野から、雲雀



第３表　長尾山の古墳群の高度別古墳分布

〔●…６Ｃ型　○…７Ｃ型
古墳は現存墳を主に示した。註⑦参照〕

丘古墳群の性格を考えたい。

長尾山の古墳群全体に関しては、分布調査によるもので発掘にまで及ぶ調査は一部に限られ、細かいデータを欠いている。したがってここでは分布状況・立地条件・群構成、石室形態によるおおまかな時期などから素描せざるを得ない。

さて、長尾山丘陵において現在確認できる古墳は約１８０基を数える。[7] これらは東西約３、５kmに渉る地域に、しかも標高５０m前後の丘陵裾部から標高２００mを越える尾根頂上部にまで広く分布する（第４図、第３表）。分布状況からすれば、分布範囲の広さに対して、古墳の数が少く、高安千塚や平尾山千塚といった大型群集墳と比較して分布密度が希薄である。このことは長尾山の古墳群が求心的なひとつのまとまりとして捉えられないことの傍証でもある。[8]

ところで、長尾山丘陵の地形に着目するならば、丘陵を南流する最明寺川、天神川によって三つに区分されよう。古墳群について言えば、最時寺川以東に雲雀丘・雲雀山西尾根・雲雀山東尾根・平井の４古墳群が、最明寺川と天神川に挟まれた地区に山本・山本奥古墳群が、天神川以西に中筋山手古墳群と独立墳である中山寺白鳥塚古墳が存在する。さらに、最明寺川以東は、前述した立地条件により雲雀丘古墳群が別個に捉えられることから、長尾山の古墳群は4つの地区に分類して把握しうる。ここではこれら4地区を東から、雲雀丘地区、雲雀山・平井地区、山本地区、中筋山手地区と呼び以下すすめる。

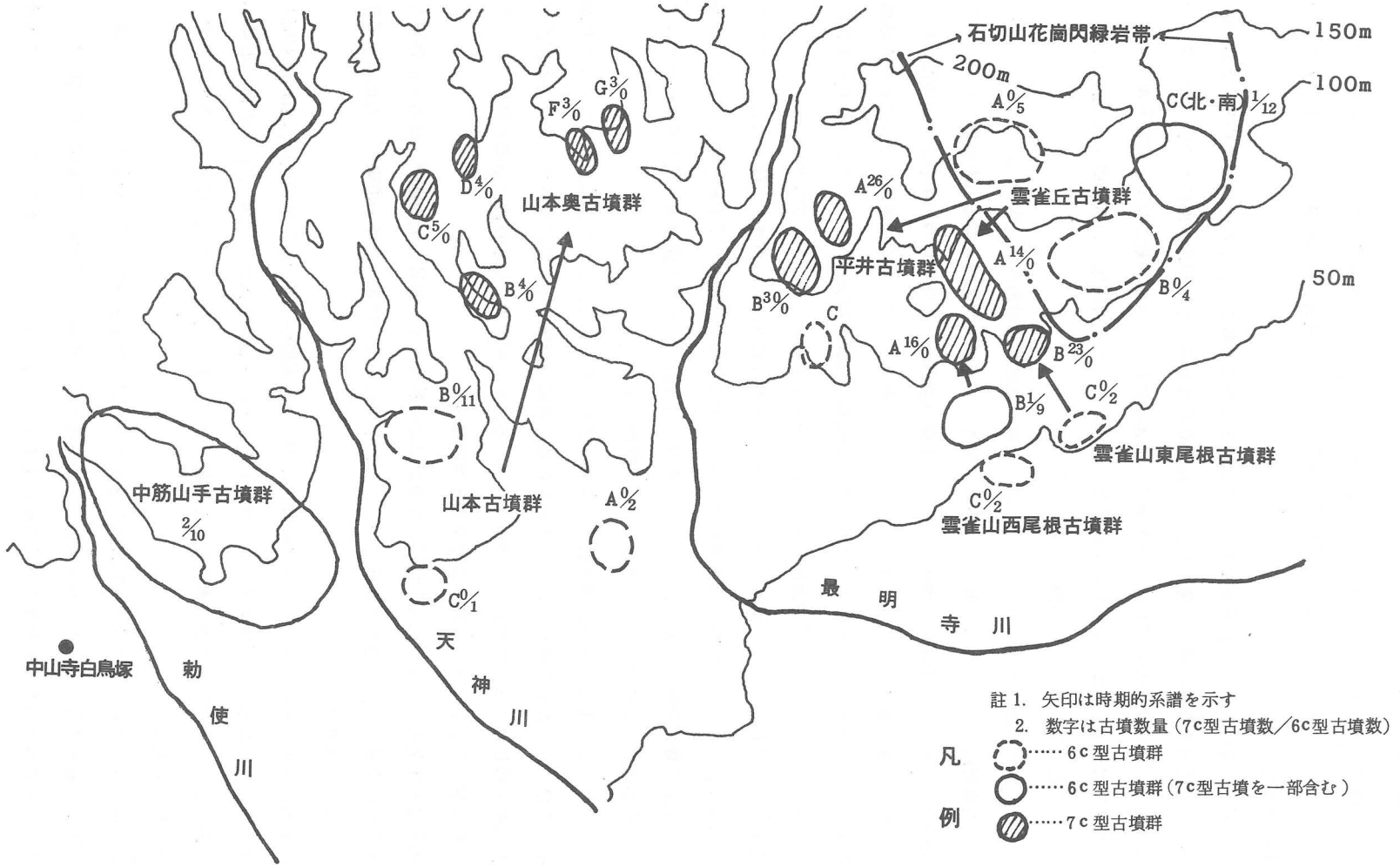
群構成を地区別にみると、まず雲雀丘地区の２２基の古墳は６世紀代の古墳が主体をなし、一部７世紀前半期の古墳が含まれる。時期的には６世紀前半ないし中葉の早い時期から７世紀前半までの長い期間にわたる。長尾山丘陵の東麓に位置し、長尾山の古墳群に含まれない川西市勝福寺古墳（６世紀前半）との関連は、形成期において考慮しておかねばならない問題である。

雲雀山・平井地区は１２３基の古墳を数え、全体の７割弱を占める。しかし、これらのうち１１０基は７世紀型の古墳で、これが主流をなして、８～３０基の規模で群集する。特に平井Ａ・Ｂ、雲雀山西尾根Ａ、雲雀山東尾根Ｂは大きな規模をもち構成されている。６世紀中葉に尾根裾部に造墓が開始され、７世紀に入り群を異にし、いっせいに終末期群集墳を展開する。[9]

山本地区は４３基あり、６世紀と７世紀の古墳がほぼ同数である。前者が尾根裾部、後者が丘陵頂上部に立地する点は雲雀山・平井地区と同様である。ただ７世紀のものは３～５基の群集で、雲雀山・平井地区に比してかなり規模が小さい。

中筋山手地区は１２基が含まれる。４つの地区の中で最も規模が小さい。７世紀代の古墳が尾根頂上部に立地するのは前の２地区と同様であるが、群集しない点は対照的である。中筋山手古墳群と勅使（てし）川を挟んで位置する中山寺白鳥塚古墳は家形石棺を内蔵した巨石墳で、独立している。位置的にみて中筋山手地区に含めて捉えられる。

以上の群構成からそれぞれの地区の時期的系譜をたどれば、雲雀丘地区は６世紀前半ないしは中葉から７世紀前半まで継続するが、大半は６世紀のうちに造墓活動が終息し、７世紀にはわずかな造墓にとどまる。雲雀山・平井地区は６世紀中葉から７世紀前半までである。ここでは７世紀にはいってから大規模な



第４図　長尾山の古墳群の分布状況と群構成　（古墳数量は現存墳を主に基準とした。註⑦参照）

群集墳が形成され、前時期の古墳数をはるかに凌いでいる。こうした現象でもって当地区の性格は特徴づけられる。山本地区は6世紀後半に形成され7世紀前半まで続くが、ほぼ均等な規模で造墓がなされる。中筋山手地区も同じく6世紀後半から7世紀前半まで継続する。しかし当地区の系譜は6世紀末頃から7世紀初頭に独立盟主墳が築造されること、7世紀前半期に古墳が群集形態をとらないことが注目される。

このように地形による区分で長尾山の古墳群を把握するとき、各地区ごとは量的・質的に状況を異にし独自の系譜をもつことが知られる。さらに山本、中筋山手地区は古墳の数量からみて、その地区内で完結しているのに対し、雲雀丘地区と雲雀山・平井地区はこの点均一な時期的系譜をたどることができない。古墳の数量という単純な条件からみれば雲雀丘地区、雲雀山・平井地区はひとつの流れのなかに捉えられる。とすれば、各地区は最明寺川で画される東側と西側で大きく状況が異なるといえるであろう。したがって、雲雀丘古墳群は立地条件の有利さから、早い時期に形成され、7世紀にはいり、雲雀山などの古墳群に造墓主体が移動した可能性も考えられてこよう。付言するならば、長尾山丘陵における古墳群の東部と西部は、巨視的には猪名川流域と武庫川流域の二つの地域の人々の墓域と考えられるのではあるまいか。雲雀丘古墳群の造墓者を猪名川流域に求めた場合、その大部分は若王寺遺跡、下坂部遺跡などの周辺にあたるであろうが、すでに指摘されているように雲雀丘眼下に展開する加茂遺跡では古墳時代後期の須恵器が出土しており⑩、これとの関連も考慮しなければならないであろう。（坂井）

〈註〉

① 昭和53年7月宝塚市教育委員会により発掘調査が実施された。近く報告書刊行が予定されている。れている。

② 白石太一郎「畿内の後期大型群集墳に関する一試考」（古代学研究、42・43合併号）

③ 昭和51年3月、芦屋市教育委員会により発掘調査が実施された。

④ 『新修芦屋市史』資料編Ⅰ（昭和51年）

⑤ 水野正好「帰化人の墳墓」（『月刊文化財』69年10月）

⑥ 『宝塚市史』第四巻　付図「宝塚市とその周辺の地質図」参照。なお、雲雀丘古墳群B群1号墳の発掘調査の際、地山中に大小の花崗岩塊が多くみられた。ここではこれらの岩塊が古墳の用材に使用されたことが知られた。

⑦ ここで算出した古墳の数量は現存墳を主に基準としたので、過去の資料にみえる消滅墳はほとんど除外した。尾根裾部に立地する古墳群はかなり数が少なくなっていることを考慮する必要がある。これについては『市史』（第4巻）を参照されたい。

⑧ 「長尾山の古墳群Ⅰ」（関西学院考古、第4号）の「Ⅰ、序説」

⑨ 岡田務ほか『宝塚市雲雀山古墳群』

⑩ 『摂津加茂』（関西大学文学部考古学研究　第3冊　昭和42年）

第４表　雲雀丘古墳群の古墳比較一覧表

C南群

古墳名	墳形	立地・標高	墳径	墳丘高	内部主体	石室形態	石室主軸	開口方向	石室長	玄室長	玄室幅	玄室高	羨道長	羨道幅	羨道高	備考
1号墳	円墳	尾根上 100m前後	約10	約2.5	横穴式 石室	両袖式	N 80°E	西南西	約7.3	3.85	1	1.6	3.5	1		出土遺物 須恵器 鉄器類 装身具
2号墳	円墳	尾根上 100m前後	6強	2強	横穴式 石室	両袖式	N80°E	西南西	4.4	3.2	奥壁 1.1	1.6	1.9	0.9		遺物不詳
3号墳		尾根上 100m前後			小型横穴式　石室	無袖式		西	現存 3		0.7	1.1				遺物不詳

C北群

1号墳	円墳	尾根上 116m	14	3.5	横穴式 石室	両袖式	N12°E	南	現存 8.5	4.7	奥壁 1.48 袖部 1.7	2.2	3.8	玄門 1.15 羨門 1.3	1.2	宝塚市指定 史跡
3号墳	円墳	尾根傾斜面 137m	15 〜 16	3.5	横穴式 石室	両袖式	正南北	南	現存 約9	3.8	奥壁 1.4 袖部 1.7	2.6 〜 2.8	現存 約5.2	玄門 1.2 羨門 1	1.6 〜 1.7	石室内祭壇 設置 石室内 セメント舗装
4号墳	円墳	尾根傾斜面 141m	15	3	横穴式 石室	右片袖式	N23°E	南南西	現存 3.81	3.31	奥壁 2.45 袖部 2.25	1.8		玄門 1.05		排水溝 石室 やや変形
6号墳	円墳	尾根傾斜面 150m	10	3	横穴式 石室	有袖式		南南東		3〜4	1.5					土砂流入

B群

1号墳	円墳	尾根上 135m	13 〜 15	3.5	横穴式 石室	両袖式	N12°E	南南西	8.8	3.2	奥壁 1.2 袖部 1.3	2.5	5.6	1		羨道部 後世の修復 出土遺物 須恵器・鉄器類・装身具

西宮市獅子ケ口の須恵器

関西学院大学考古学研究会

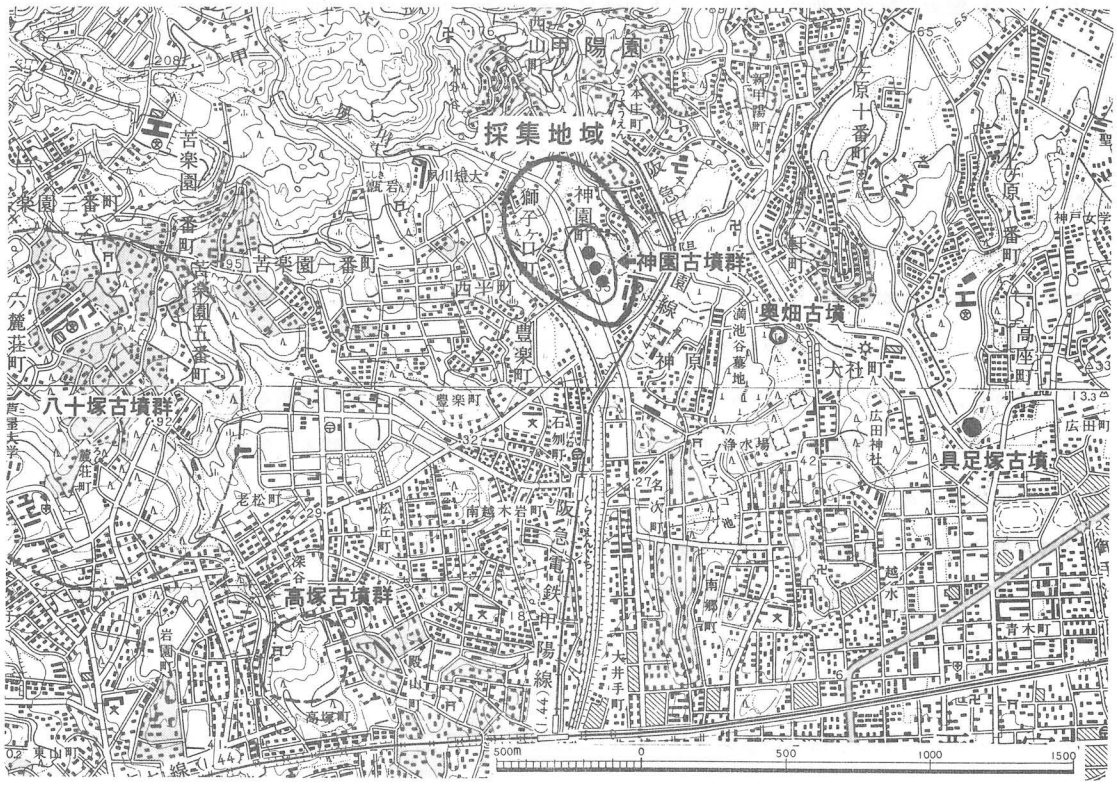
1. 経　　過

ここに紹介する土器は、２０数年前に地元の方が永年採集し、当研究会に持ち込んだものである。したがって、採集の正確な年月・経過・場所については不詳な点が多い。

2. 位　　置（第１図）

現在の西宮市獅子ケ口町は、阪急苦楽園口の北方約７００ｍの地点で、夙川上流の東岸沿いにあたるが、明治４０年代の地図によると、かつての獅子ケ口とは現在の神園町をも含む夙川東岸一帯を指したようである。この地区は、夙川の流れによって形成された扇状地の標高３０ｍ～５０ｍの緩斜面である。

獅子ケ口附近には神園古墳群が分布する。当古墳群は現在神園１号墳①（夙川学院構内古墳）・神園２号墳（神園古墳）・神園３号墳②の３基が確認されている。いずれも６世紀後半から末頃の築造と考えられて



第１図　獅子ケ口の位置　（太線内が採集地域）

いる。

周辺では、東南東約1㎞に奥畑古墳、約1.8㎞に具足塚古墳[③]、南西約1.6㎞に高塚山古墳群、西約1.5㎞に八十塚古墳群がある。

3. 遺　　物（第2図）

採集された土器のうち実測可能なものは9点であった。

(1)は杯蓋で、口径は13.4㎝を測る。天井部外面は回転ヘラ削りを施し、内面は静止ナデを行う。他はロクロナデである。胎土・焼成ともに良好で、色調は黒灰色を呈す。なお、天井部外面に二条のヘラ記号が刻されている。

(2)は形態と手法の特徴より、(1)の杯蓋と対になるものと思われる。口径は12.0㎝で立ちあがりはやや内傾し、端部は丸くおさまる。黒灰色を呈し、胎土・焼成ともに良好である。

(3)は短頸壷の口縁部で、口径は7.7㎝を測る。外面・内面ともにロクロナデをおこなうが、とくに内面は強い。胎土・焼成ともに良好で、色調は黒灰色を呈す。

(4)は小型の壷で、外反した口頸部と肩の張った胴部をもつ。胴部外面はほぼ全面にわたってカキ目調整が施され、ほかはロクロナデによって仕上げる。色調は淡黄灰色で、胎土は良、焼成はやや不良である。

(5)は台付長頸壷の胴部と脚部である。最大腹径は16.9㎝であり、胴肩部に2条の凹線をめぐらす。胴下半部外面にヘラ削りを施したのち、ロクロナデによって全面を仕上げる。胴下端部内面には、接合痕が残る。色調は淡青灰色で、胎土、焼成ともに良好である。

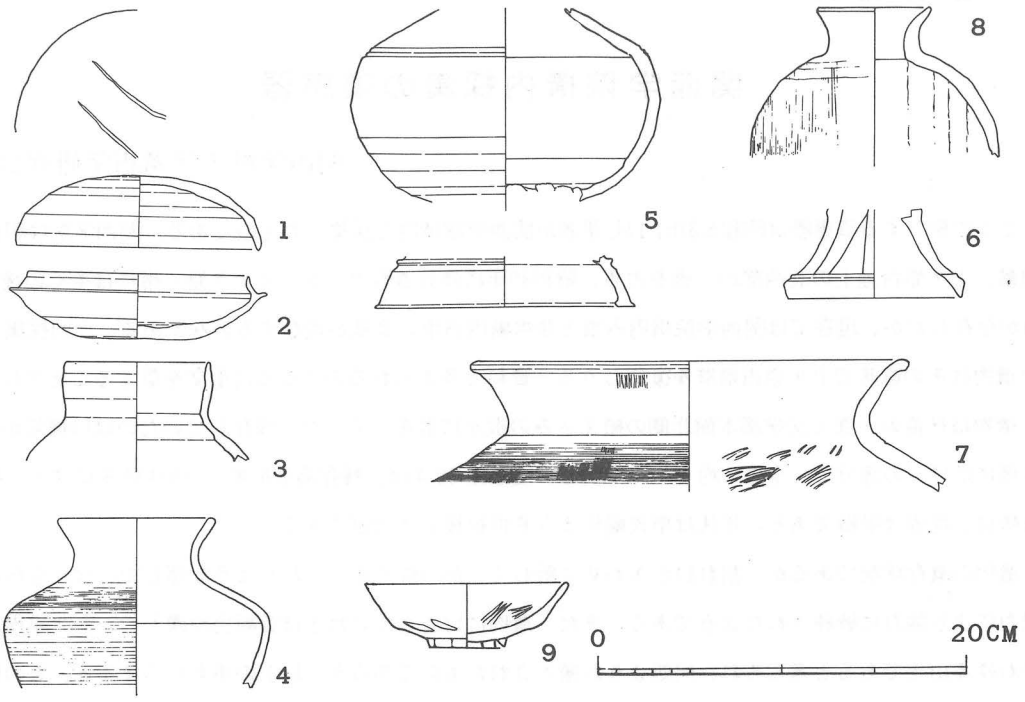
(6)三方透しを配した高杯の脚部である。色調は外面が淡灰色で内面が青灰色である。胎土は1㎜程度の砂粒を多く含むが良好であり、焼成も良好である。磨滅が著しい。

(7)は大型甕の口頸部で、口径は23.0㎝を測る。外面は平行タタキ、内面は同心円タタキを施したのち、体部外面にカキ目調整をおこない、さらに全面をナデる。色調は外面が黄灰色、内面は自然釉により黒色を呈する。胎土は1～2㎜の砂粒を含み、焼成は良好である。

(8)は提瓶で、耳を欠く。丸味のある体部をもち、残存する片面にカキ目調整を施す。外反した口頸部はロクロナデによって調整される。内面には巻上げ痕と粘土円板接合痕が残る。色調は淡青灰色で、胎土、焼成ともに良好である。

(9)は素焼きの皿で、口径11.0㎝、器高3.5㎝、高台ははりつけたのち、指でつまんで調整したもので高さ0.5㎝である。内面はヨコナデ調整されたのち軽くヘラ磨きを施す。色調は淡黄灰色で一部に黒色の媒火痕がある。胎土、焼成は良好である。これは他の遺物とは時期が隔たり、年代はかなり下ろう。

以上9点の他に『関西学院考古』第3号で紹介した提瓶の完形品1点がある。（P15、遺物番号30）



第２図　獅子ケ口採集遺物　実測図

4. 小　　結

遺物の出土状況が不明のため、遺跡の性格等について深く論及することはできない。しかし、採集された須恵器については(6)のほかはすべて６世紀後半のものであることから、おそらくは後期古墳に伴う遺物であろう。なお(6)は、５世紀後半から６世紀初頭の時期を示し、他の遺物と分けて考えられる。

獅子ケ口には神園古墳群が存在する。当古墳群は現在３基の古墳が確認されるにとどまるが、これも神園古墳群に伴う資料とすれば、３基のほかに消失した古墳があったと考えられる。したがって神園古墳群は、隣接する八十塚古墳群、仁川流域の後期群集墳の規模に及ばないとしても、これらの古墳群の間隙を埋める後期群集墳として把握されよう。（中野・三谷・土谷）

〈註〉

① 櫃本誠一ほか「夙川学院構内古墳調査報告」（『兵庫県埋蔵文化財調査報告第１集』昭和４６年）

② 西宮市教育委員会により昭和５２年８月緊急発掘された。概略は、衣川真澄「西宮市神園３号墳調査記」（『関学考古、７７』昭和５３年）によられたい。

③ 勇正広ほか「具足塚発掘調査報告」（西宮市文化財調査報告書第一集　昭和５１年）

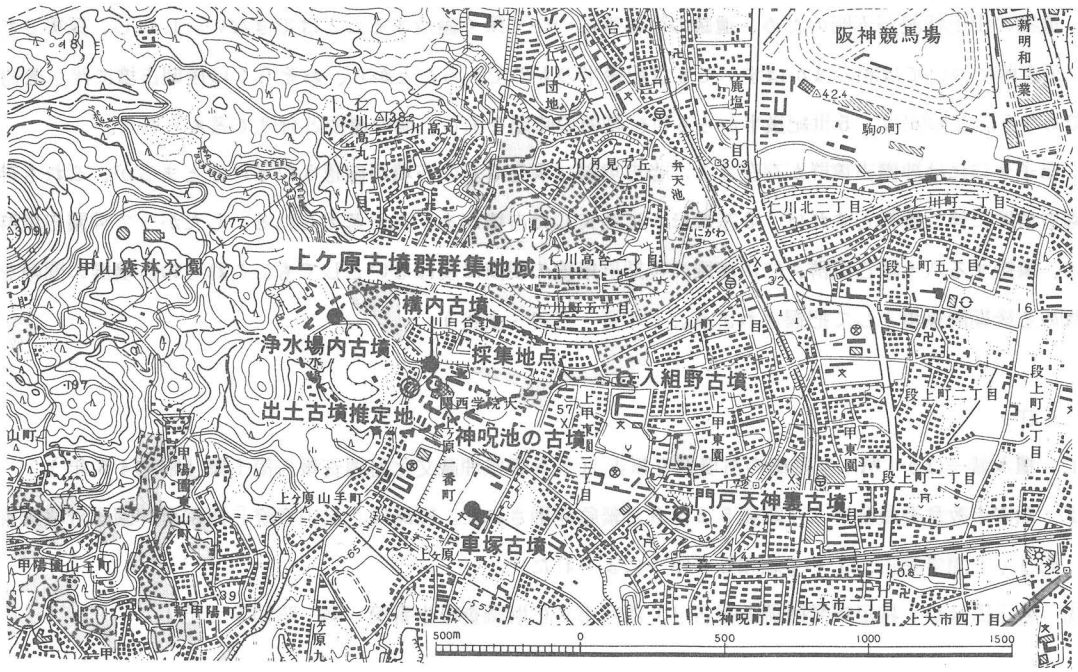
関西学院構内採集の須恵器

関西学院大学考古学研究会

ここで紹介する須恵器は昭和53年11月、筆者が関西学院構内で採集したものである。関西学院は甲山の東麓、上ケ原台地上の北西部の一画を占め、昭和初年に建設された。かつて上ケ原一帯には多くの後期古墳が存在したが、現在では関西学院構内古墳と浄水場内古墳の2基が現存するのみである。今回採集された遺物はその意味で上ケ原古墳群を復原しうる一資料と考えられるのでここに小文を草することにしたい。

遺物は杯蓋の一部で文学部本館北側の植え込みの根元に散布していた。残存していたのは口縁部から天井部にかけての部分で、全体の約1／5にあたる。復原径12.4㎝、残存高2.6㎝で、暗灰色を呈する。胎土は精良、焼成は堅緻である。年代は型式編年より6世紀後半に比定できる。

遺物の遺存状況であるが、割れ口がきわめて新しく、かつ鋭くえぐられたような感じで、なんらかの機械力により強力に破砕されたようである。また、遺物に付着していた土は黄褐色砂礫土で、上ケ原周辺のいわゆる山土であると考えられ、何処よりか搬入されたものであろう。以上の事実からすると、この杯蓋は地中に完形かまたはそれに近い形で埋蔵されていたものが、最近になって造成工事等により偶然に破砕され廃土とともに植え込みに廃棄されたと考えられる。ここで思い当るふしがあるのはキャンパス内での法学部本館増築である。この建物は鉄筋四階建てで当然地中深く基礎を施している。とすれば、これによ



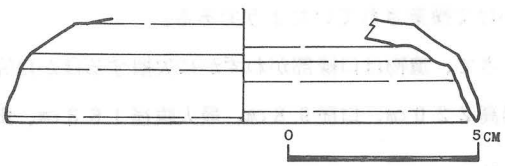
第1図　須恵器彩集地点と出土古墳推定地

って遺物が偶発的に出土したことは充分考えられよう。

少々回りくどく書いたが、結論的に言えば今回法学部の校舎が建設された地点に杯蓋とそれに伴う古墳が完全な形でないにしろ存在していたのである。かっての造成で古墳が埋没してしまったのであろう。

さて、上ケ原古墳群を含む仁川流域の後期古墳については筆者らが分布状況、形成過程を復原的に考察を加えた（「仁川流域の後期古墳」、『関西学院考古』第3号、昭和51年）。上ケ原古墳群の群集墳は仁川の谷に傾斜する台地北辺に集中する。したがって今回破壊されたと思われる古墳や神呪池の古墳(『西宮市史』第7巻、昭和34年）は台地上の平担面に築かれていながらもこれらの古墳に接しており、同一のまとまりとして把握できる。神呪池の古墳は構内古墳の南東約20m（現在は第五別館の周辺）であり、法学部本館はこの地と南接する位置にある。なおキャンパス内に今夏頃より大型の花崗岩石材が数個放置されているが、これらは破壊された古墳の用材とみて大過ないであろう。

以上いくらか推測を加え採集された遺物について述べてきたが、全く古墳が認知されずに消滅したことは遺憾である。確かに『西宮市埋蔵文化財遺跡分布地図及び地名表』（西宮市教育委員会、昭和51年）には構内古墳のほか神呪池の古墳、テニスコートにあった古墳の4基は点として示してある（テニスコートには2基、構内古墳のほかは消滅墳として）。しかしながら、今回紹介したケースのようにかつての造成でもなお完全に古墳を破壊していないことも考えられ、今後充分留意する必要があろう。少なくとも関西学院構内は埋蔵文化財包蔵地として認識し、新しい造成等の対策を講じねばならないことを肝に銘じたい。（坂井）



第2図　関西学院構内の須恵器（杯蓋）

関西学院考古　既刊

2号　関西学院構内古墳現状・遺物実測報告（本文32P・図版7葉）

新たに関学構内古墳の実測をし、あわせて未発表であった須恵器・玉類を報告した。

絶版

3号　仁川流域の後期古墳（本文24P・図版13葉）　残部僅少　　頒価　¥700（送料共）

仁川流域に所在する上ケ原、五ケ山、五ケ山西、旭ケ丘の4古墳群の研究考察。未発掘資料を加えた基礎資料である。　残部僅少　頒価　¥700（送料共）

4号　長尾山の古墳群Ⅰ、西宮市甲風園の弥生式土器、横穴式石室の平面形について（本文28P、図版17葉）　頒価　¥700（送料共）

長尾山の古墳群Ⅰは研究史・問題点の提示、中筋山手古墳群についての報告。甲風園の土器は、武庫川西岸の弥生時代前期の資料。また横穴式石室の平面形は漸新な視点からの研究ノートである。

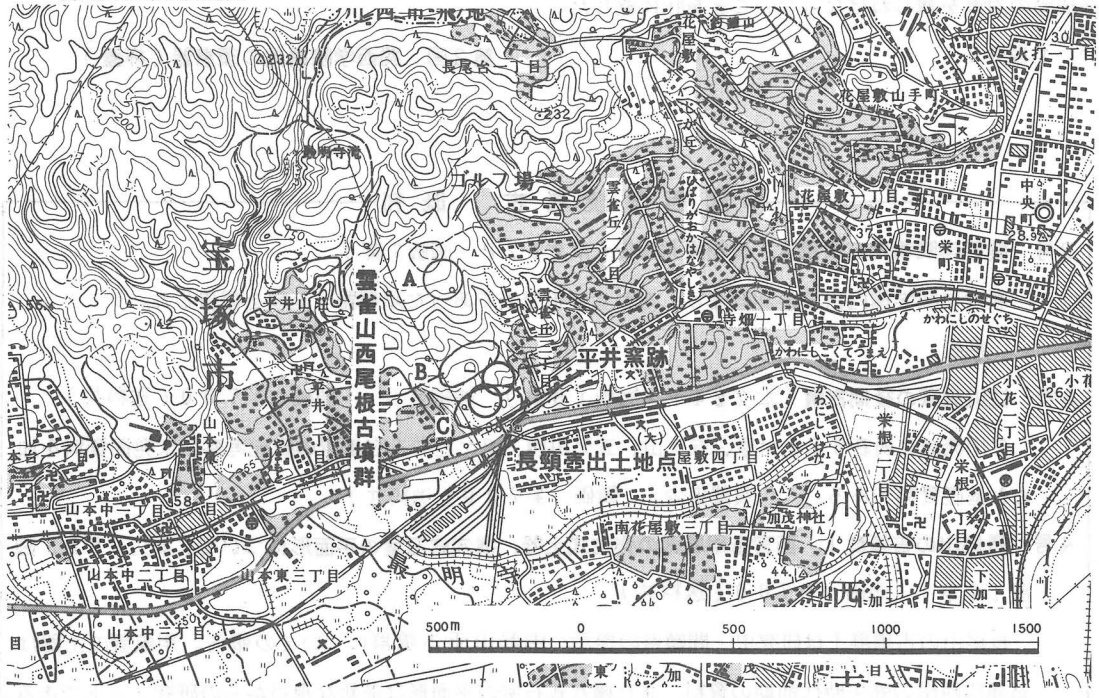
雲雀丘学園所蔵の長頸壺

坂井秀弥

宝塚市にある雲雀丘学園が敷地内から出土した須恵器を所蔵しているということを耳にした。地理的にみて長尾山の古墳群との関連がまず想定されたので、雲雀丘学園に足を運んでみたところ、実見し記録する機会を得た。また出土地点や経過なども聞くことができたので、ここに紹介することにしたい。なお発表することを快諾して下さった雲雀丘学園に感謝いたします。

須恵器は学園のグランドにベンチを設ける際に出土したという。このグランドは雲雀山(ひばりやま)西尾根古墳群の分布する尾根の先端部標高４０～５０ｍ付近を造成したもので、行政区画では宝塚市平井四丁目にあたる。出土地点はこのうちの北側削平面である。雲雀山西尾根古墳群はＡ・Ｂ・Ｃの３群より構成され、グランド全体はＣ群に含まれる。Ｃ群にはかつて２基の古墳が確認されていたが、グランド造成によって消失した。Ｂ群はＣ群の北２００ｍにあり、現在１０基の古墳（１号墳のみが小型横穴式石室）が遺存する[①]。またＢ、Ｃ群の付近には平井窯跡が存在する[②]。この窯跡については不明な点が多いが、７世紀から８世紀にかけて操業されていたようである。

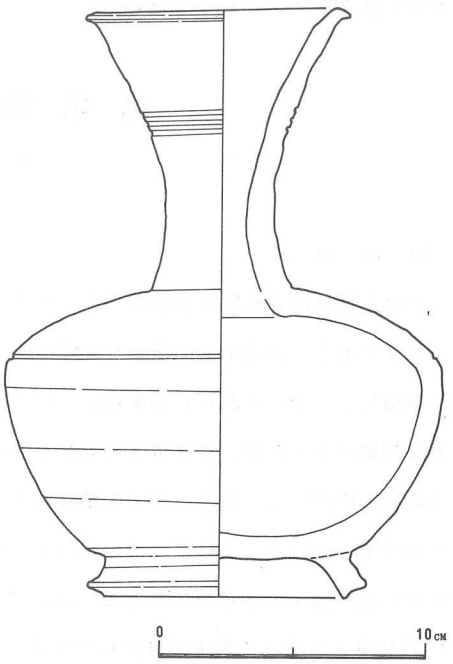
さて、遺物は口縁部がわずかに欠損するほかは完全な長頸壺である。全体に厚手でがっしりしており、器高２２.０㎝、口径９.８㎝、最大腹径１６.３㎝、脚径９.０㎝を測る。口頸部に３条の凹線、胴部肩に１条



第１図　長頸壺出土地点

の凹線をそれぞれ配する。胴部下半はヘラケズリの痕がわずかにみられるが、全体にロクロナデを施す。口頸部はとくに強い。焼成は堅緻。胴部上半が自然釉で黄灰色を呈するほかは灰色である。胎土は細砂粒を多く含み、5㎜大の砂粒も散見される。この長頸壷は船橋遺跡の須恵器Ⅰの型式に類似する③。時期は7世紀末から8世紀前半に相当しよう。

出土状況が明確でないため遺物に伴う遺構ははっきりしない。しかし、位置からすれば古墳か窯のいずれかに伴うものであろう。古墳の副葬品とすると、あまりに新しすぎはしないかという懸念がある。長尾山の終末期古墳である小型横穴式石室からは7世紀後半以降の遺物は検出されていない。したがって平井窯跡の製品である可能性が強いわけであるが、その実態についてはよくわかっていないうえ、現地踏査でも窯壁など確認できなかった。時期的にみればやはり窯との関連を考えるのが妥当であろうが、結論は今後に保留せざるを得ない。



第2図　長頸壺　実測図

〈註〉

① 1・2号墳は昭和48年に発掘調査が実施されている。(宝塚市教育委員会『宝塚市雲雀山古墳群』、昭和50年)

② 笠井新也「摂津国川辺群平井山に於ける古代製陶所の遺跡及びその遺物」(考古学雑誌、5－9　大正14年)

③ 平安学園考古学クラブ『船橋』Ⅰ(昭和37年)

関西学院考古　次号(第6号)　掲載予定

調査報告　長尾山古墳群Ⅲ
研究ノート　横穴式石室の平面形についてⅡ……岡野慶隆
1980年3月　刊行予定

猪名県と畿内の県

岡田　務

はじめに

日本の古代の地方制度が国県制であったことはいうまでもない。国県制とは、国造と県主による地方支配の制度であり、古代史上の重要な問題であるところから、これまで数多くの研究がなされ、すぐれた業績が蓄積している。それぞれの業績については、すでに「研究史」[①]もあり、詳細はそれによられたいが、重要な問題であるため、さまざまな見解が出されている。

国県制の研究には、国造と県主の関係は当然のこととして、現在では、部民制やミヤケ制との関連、さらには古墳とどのように結びつくのかなど、研究は深化、複雑化している。こうした国県制にかかわる古代史上の諸問題を大きな目でみることは、とうてい私などの能力ではいかんともしがたい。ここでは、とくに県制をとりあげ、若干の検討を加えるのみである。

また、県は西日本を中心として、広い範囲にわたって分布している。この全国に分布する県を、一つ一つとりあげ、詳細な検討を加えるなどということは、これまた私の力の及ぶところではない。ただ、「今日までの県および県主の研究をさらに深めてゆくために」は、「地域の実態をふまえた研究が必要」であるという意見[②]に勇気づけられ、「郷土史的附会に陥」るかもしれないが、かって西摂平野に存在した「猪名県」を中心に、畿内の県について、若干の問題提起を試みたい。

一、猪名県について

『日本書紀』仁徳天皇三八年七月条には、次のような記事がある。

そのころ天皇は高台に出て皇后とともに暑さを避けるのを常としていたが、毎夜のように　餓野から寂しい鹿の鳴き声が聞こえてきて、あわれふかいおもむきを感じていた。ところがその月も終わりになって、いつもの鹿の声が聞かれなくなり、天皇は皇后と不審の気持を語り合って寝についたが、その翌日に猪名県の佐伯部が、天皇の御膳にと一頭の鹿を献上してきた。天皇は膳夫に命じて、どこでとった鹿であるかと問わせたところ、　餓野の鹿であると答えた。献上された鹿が日ごろ自分の心を慰めてくれていた鹿であったことを知った天皇は、佐伯部を皇后の近くにおくことをきらって、かかりの役人に命じて、これを安芸の国の淳田に移させたという。[③]

この物語自体を、そのまま仁徳天皇の時の史実とは考えがたいが、猪名県がみえることは注目される。ただ、猪名県に関する史料は、この物語が唯一のものであり、他にはまったくみえない。はなはだ心もとないが、西摂平野の東部を流れる猪名川の流域は、古代より「イナ」と呼ばれていたことは確かで、『和名抄』には河辺郡為奈郷がみえ、『延喜式』の神名帳には、豊島郡に為那都比古神社がみえる。また、

『新撰姓氏録』には、摂津国皇別に為奈真人、摂津国諸蕃に為奈部首がみえ、猪名川流域一帯が猪名県の故地であったことに疑いはない。かってこの地域は風光名美な場所であったらしく、『万葉集』などにも、「イナ」をおりこんだ歌が数多くみられる。④

ところで、上記したように、猪名県に関する史料は非常にわずかであり、そのためか、従来、猪名県の研究は、それほど進んだものではなかった。しかし、近年になって、猪名川流域の各市において、市史が相次で公刊され、⑤その市史には必ずといってもいいくらい猪名県がとりあげられた。

さらには、県の研究の深化にともない、「地域の実態をふまえた研究」が重視されるようになり、ようやく猪名県が注目されるようになった。

以下、諸先学のすぐれた研究の成果に導かれながら、猪名県および畿内の県について、論を進めていきたい。

二、 猪名県をめぐる諸問題

これまでの猪名県に関する諸研究のうち、もっとも注目されるのは、長山泰孝氏の「猪名県と為奈真人」であろう。⑥この論文で、長山氏は、猪名県の実態、県制全般からみた猪名県、さらには猪名県主と為奈真人の関係など、すぐれた見解を述べられている。

長山氏は、猪名県で問題となるのは、(1)猪名県の所在地、(2)猪名県の性格、(3)猪名県を支配する氏族の三点とされ、それぞれ県の成立時期などをからませながら検討を加えられた。それを簡単に要約してみると、次のようである。

(1) 猪名県の所在地

『和名抄』に河辺郡為奈郷がみえるところから、為奈郷の旧域とされる尼崎市の北部が猪名県の主体をなし、さらに猪名川を遡り、河辺・豊島両郡にまたがるかなり広い地域もその領域としていた。

(2) 猪名県の性格

「仁徳紀」の 餓野の鹿の説話から、猪名県が狩贄の貢納をその職掌にしていたのではないかと想像されるが、同じ物語のなかに佐伯部のことがみえ、同じく膳夫がでてくることなどから、不確実ながら、猪名県は五世紀に盛行した前期県に属するものと推定され、その職掌の一つはおそらく内廷の膳司に対する狩贄の貢納であったであろう。

(3) 猪名県を支配した氏族

県を支配したのは県主であり、猪名県を支配した氏族は猪名県主とよばれたはずである。ただ、猪名県主をなのる氏族は知られておらず、おそらく五世紀末から六世紀にかけての県制の変動期に、没落し消え去ったのであろう。為奈真人が猪名県主の後身とする説もあるが、為奈氏が比較的新らしい皇親の氏族であることや、その氏族的地位などからみても、別の氏族とするほうが妥当である。なお、猪名県主は、在地の有力氏族であったと思われるが、河辺・豊島両郡にまたがる猪名県を一円的に支配していたわけではなかろう。

以上のように長山氏の見解を要約してきたが、非常にすぐれたものであるといえる。ただ、若干の異論もあるので、それを紹介し、さらに猪名県に関する理解を深めたい。

まず、(1)については、河辺郡為奈郷が猪名県の故地であるとする、従来からの説がある[7]。しかし、前記したように、豊島郡にも「イナ」を冠する為那都比古神社がみえ、猪名県を為奈郷に限定することは無理であると思う。また、渡辺久雄氏は、良質の木材を重視され、猪名県は、猪名川の上流から下流まで、すなわち旧豊能郡と河辺郡を合せた範囲とされた[8]。

県の範囲は、つまり県主の支配の及んだ地域であり、等閑視できない重要な問題であるといえる。したがって、その比定は慎重にならざるをえないが、前者はあまりに狭小であり、後者はあまりに広大である。猪名県の所在地については、さらに後述するが、ここでは猪名川の運んだ土砂で形成された沖積平野と、それを囲む丘陵地が猪名県の範囲であり、これを「猪名川文化圏」と呼んでおきたい。

(2)については、ほぼ異論はないが、木材の貢納を重視する考え方もある[9]。もちろん、県一般の職掌は、「大王の祭祀のための供御料の貢納や、内廷に直結し大王家の家政に必要な物資と労働を提供することにあった」[10]のであり、猪名県における狩贄の貢納は、猪名県の特徴的な職掌と考えることもできる。ともかく、史料の制約上、猪名県の性格について、詳細に論ずることは困難である。

(3)については、すでに為奈真人が猪名県主の後身とする説[11]のあることを述べた。この問題については、長山氏の論文[12]で詳細に検討されており、それを参照されたい。ただ、県主を名のる氏族、たとえば三島県主、珍県主、高市県主などは、律令時代には郡司という地方官人としてみえており[13]、在地の有力者として、長くその勢力を保持したことが知られる。これに対し、為奈真人は、四位ないしは五位を、その最高の位階とする[14]、中流ながらも中央貴族であったことを注意しておきたい。

以上によって、これまでの猪名県をめぐる諸問題は、おおむね長山氏の説が支持されると思われる。ただし、長山氏は、文献史料から猪名県を考察されたため、現在西摂平野に分布する諸遺跡と県がどのように関連するのかという問題には論及されていない。次に、おもに考古学的資料などから、県の成立時期を中心に考えてみたい。

三、　県制の成立時期とその契機

県の成立時期については、(1)、三世紀後半から五世紀にかけてとする上田正昭氏の説[15]、(2)、おもに五世紀代とする吉田晶氏の説[16]、(3)、五世紀後半から六世紀前半にかけてとする原島礼二氏の説[17]、などがある。この三つの説に対して、詳細な検討を加えたり、批判をおこなうことは、本稿の目的ではないので、紹介だけにとどめておく。ただ、私は、上田説がもっとも妥当だと考えており、主にこの説を中心として、論を進めていきたい。

県制の成立時期を考えるためには、まず、畿内の県に注目すべきであろう。なぜなら、県制は、全国で同時期に成立したのではなく、王権の強く及ぶ畿内でまず成立したと考えられるからである。そして、王権の拡大過程にともなって地方にも県が波及したのであろう[18]。

ところで、畿内の県を整理すると、次のようになる。

〈大和〉　菟田（猛田）・春日・層富・山辺・十市・高市・磯城・葛城

〈山城〉　鴨・栗隈

〈河内〉　茅渟・河内・三野・志貴・紺口

〈摂津〉　三島・猪名

以上のように、畿内においては、一七の県を摘出することができる。国別では、大和→八、山城→二、河内→五、摂津→二となり、畿内でも県の分布にかなりのばらつきがみられる。

大和の場合は、奈良盆地内にはほぼ全域にわたって県が分布し、宇陀地方にまで及んでいる。吉野地方を除くと、ほぼ国全域に県が設置されたと考えられる。

河内の場合も、中河内に河内県・三野県、南河内に志貴県・紺口県、和泉に茅渟県が設置され、北河内を除くと、濃密に県が分布していたといえる。

ところが、山城・摂津の場合は、淀川流域を中心として、四県が分布しているにすぎず、大和や河内と比較すると、やや散在的であることはいなめない。ただ、山城・摂津における県には、すべて前期古墳が所在しており、それぞれの地方でも中心的な地域であったことは注意すべきである。

ところで、このように、畿内における県の分布に、国別でかなりのばらつきがみられるのは、何らかの意味があるのだろうか。一つの考え方としては、畿内のうちでも、王権の支配力が強国で、国全体に及んだ地方（大和・河内）と、主要な地域にのみ及んだ地方（山城・摂津）があり、その王権の支配力の強弱が、県の分布に反映しているのではなかろうか。県が大王家と密接な関係をもつところから、県の設置を、地方勢力の大王家に対する一種の服属の証拠とみなすならば、畿内における県の分布は、いつごろの畿内の状態を反映しているのであろうか。

上田氏によると、畿内の県は前期古墳の所在と対照するとされているが、[19]今、その実態をみることにする。なお、古墳時代前期といっても、現在では二小期にわけて考えるのが一般的で、これを前期前半（四世紀前半）、前期後半（四世紀後半）と呼ぶことにする。[20]前期前半は古墳の「発生期から揺籃期」、前期後半は古墳の「発展期」とされている。[21]

さて、前期前半の古墳は、「発生期から揺籃期」にあるためか、非常に数が少なく、畿内でも散在的に分布しているにすぎない。まず、畿内の県は前期前半の古墳の所在と対照しないと考えられる。前期前半の古墳のなかで、とくに注目されるのは、奈良盆地の東南部に集中する四基の前方後円墳である。[22]これらは、すべて二百メートルを越える大型前方後円墳で、大王墓と呼ぶのにふさわしい。このように、奈良盆地の東南部は初期大和政権の所在地と考えてよく、この地域を県名でいえば、磯城県・山辺県・十市県・高市県にあたると思われる。これらの県は、かっては「祭祀的・部族的な人的な団体として独立の小国であった[23]」かもしれないが、おそくとも四世紀の前半には統合され、初期大和政権の基盤となったと考えられる。したがって、この地域には、古墳造営以前すでに県的存在が成立していた可能性がある。

前期前半の古墳として、さらに注目すべきものとして大塚山古墳がある。大塚山古墳は京都府相楽郡山

城町椿井に所在する全長約百八十メートルの前方後円墳であるが、その規模もさることながら、三二面をこえる三角縁神獣鏡が出土したことで有名な古墳である。[24] ところが、この大塚山古墳の所在する地域に県が存在したという史料がないのである。県と前期古墳が対照しない例として、これ以上のものはないと思われる。大塚山古墳の被葬者は、その副葬品の内容などから、初期大和政権と密接な関係をもっていた[25]とされており、決して独立した地位を保っていたわけではない。前期古墳を県制の成立のよりどころとすれば、前期前半には、まだ県制が成立していないとするのが自然のようである。

前期前半から後半にかけて、古墳は「発展期」をむかえ、その数が増加するとともに、畿内の全域にわたって前期古墳が分布するようになる。詳細はさけるが、畿内における県の所在地には、ほぼすべて前期古墳が出現するようである。県が前期古墳の所在と対照するのは、古墳時代の前期後半、すなわち四世紀の中葉から後半にかけての時期である。古墳からみれば、県制の成立はこの時期におくのがもっとも妥当に思われる。しかし、やはり、前期後半の古墳は、畿内において、県の所在地以外のところにも分布している。これは、前期古墳のほうが、県よりも広範囲にわたって分布していることを示している。もし、古墳時代前期に、すでに県制が成立していたとするならば、県主であった人も、そうでない人も、なんらかの形で大和政権と関係をもち、かつ勢力を有しておれば、前期古墳を造営しえたと考えざるをえない。

具体的な例として、摂津における県と前期古墳をとりあげてみよう。前記したように、摂津には三島県・猪名県という二つの県が知られている。三島県に所在する前期古墳としては、弁天山C一号墳・紫金山古墳・将軍山古墳などがあり、猪名県には万籟山古墳・池田茶臼山古墳が知られている。[26] これらの古墳は、前期前半から後半にかけて、ほぼ同時期にあいついで造営されたとみられているが、とくに紫金山・将軍山・池田茶臼山・万籟山の各古墳は、立地点や内部構造などに類似点が多いとされている。[27] しかし、墳丘の規模からみれば、紫金山・将軍山が百メートルを越すのに対し、万籟山・池田茶臼山は六十メートル前後であり、三島県のほうに、より強い政治集団の存在が推定しうる。[28] これらの古墳の被葬者が県主であるとすれば、同じ県といっても、県主の支配する土地・民衆には、あきらかに差異があったと考えられる。

また、六甲山南麓の海岸地帯には、古墳時代前期の前方後円墳や円墳が点在している。これは、瀬戸内海航路としてのこの地域の重要性を示すもの[29]と思われるが、県が存在した史料はない。とくに、神戸市東灘区に所在するヘボソ塚古墳[30]は、全長六十メートル前後の前方後円墳で、その副葬品の内容からみても万籟山古墳や池田茶臼山古墳とそれほどの差はなく、むしろすぐれた点が多いといえる。

以上のように、摂津における県と前期古墳をみると、(1)県の所在地でも、前期古墳の規模には差があり、それは在地勢力の強弱を示すものである、(2)県の所在地以外にも前期古墳は存在し、県の所在地における古墳とそれほどの差はない、(3)したがって、前期古墳の大小ないしは副葬品の優劣は、その被葬者の勢力の強弱を反映し、県主かいなかの問題ではない、のようなことがいえる。

これらのことから、前期古墳が県や県主となんらかの関係があるとしても、両者を単純に結びつけることはきわめて危険であろう。

県制の成立時期を考えるうえで注目されるのは、畿内における県の分布である。前記したように、県が

大和・河内に濃密であり、山城・摂津に散在的であるという事実は、古墳時代よりもむしろ弥生時代の畿内の社会を反映しているのではなかろうか。

弥生時代中期中ごろの畿内の弥生式土器は、おおむね国を単位とした地方色をもっていたが、大きくみると畿内北部と南部に大別できるとされている[31]。畿内北部は摂津・山城・北河内（枚方丘陵）をさし、畿内南部は中河内・南河内・大和・和泉をさす[32]。今、県の所在を南北部別にみると、畿内北部→四、畿内南部→一三となり、圧倒的な差のあることがわかる。これは、畿内南部がほぼ統一され、やがてその勢力によって畿内北部も統合されていく時期、すなわち弥生式土器に「畿内的一体化」のみられる弥生時代後期の畿内の社会を反映しているのではなかろうか。弥生時代後期に県制が成立したと考えるには無理があるにしても、その萌芽的な県的存在は指摘することができるのではなかろうか。

制度としての県制の成立には、なんらかの契機が必要であろう。その契機を具体的な例をもってみようとすれば、大古墳の造営に注目すべきであると思われる。いうまでもなく奈良盆地の東南部に所在する四基の大型前方後円墳である。これらの古墳を造営するために、いかほどの労働力と物資を必要としたかを計算することは不可能であるが、それが多大なものであったことに疑いはない。その古墳の一つである箸墓には、「是墓者、日也人作、夜也神作、故運大坂山石而造、則自山至于墓、人民相踵、以手遞伝而運焉」という伝承がある。これを史実として、そのまま認めるわけにはいかないが、巨大な前方後円墳の造営には、膨大な物資と労働力が必要であり、かつ神秘的な要素が強いといえる。

この多大なる物資と労働力は、畿内南部はもとより畿内北部にも、つまり畿内一円にわたって求められたのではなかろうか。偉大な王の墳墓造営のために、弥生時代以来の関係をもつ畿内の諸豪族は、強制的であるかいなかはわからないが、共同して物資と労働力を提供したと考えられる。そして、このことにより、諸豪族とは隔絶した一人の大王が確定し、それを中心とした初期大和政権が成立したのではなかろうか。さらに、墳墓造営に奉仕した諸豪族を、政権下に組み入れる制度、これこそ、第一次的な県制の実態ではなかったろうか。

以上、考古学の立場から、県制の成立とその契機をみてきたが、大型前方後円墳の造営を過大評価しすぎたかもしれない。しかし、古墳時代は、「階級および階層の差異が墓制に極端に反映した」、「日本における最初の階級社会」であるといわれている[33]。奈良盆地の東南部に所在する大型前方後円墳は、古墳時代の前期前半における頂点であり、また、それを起点として各地に前期古墳が出現する。前方後円墳は畿外で発生したのかもしれないが、それを階級社会の具現化として位置づけたのは、大型前方後円墳の造営であろう。

弥生時代以来、社会の階級化は進んだであろうが、多大な物資と労働力を、一個人の「非生産的」建造物に「浪費」することによって、一地域の支配階級が明確な姿であらわれる。まして、その地域のわくを超越する大型前方後円墳は、過大に評価されるべきであろう。

四、 猪名県と県主

県を支配したのは、いうまでもなく県主である。しかし、一人の県主によって、県が一円的に支配されたのかというと、必ずしもそうではないという意見がある[34]。とくに、県が広範囲の領域を占めていた場合、その地域には大小の在地勢力が存在していたであろう。この場合、県主はその地域の代表的な氏族であるとするのが自然のようである。それが古墳の規模と内容に反映しているとするならば、三島県主－弁天山古墳群、栗隈県主→久津川古墳群というような関係を相定することも可能である。ところが、すべての県の所在地でこのように都合よくいくわけではなく、かえって在地の複雑さを示すと思われる例もある。

猪名県の所在地である猪名川流域一帯を眼下にする丘陵上には、次のような前期古墳が分布している。

長尾山丘陵－万籟山古墳[35]・長尾山古墳[36]

五月山丘陵－池田茶臼山古墳[37]・娯三堂古墳[38]

刀根山丘陵－待兼山古墳・御神山古墳・新免上佃古墳[39]

以上、三丘陵にわたって七基の前期古墳が知られているが、長尾山古墳が前方後方墳、娯三堂古墳が円墳であるほかは、すべて前方後円墳である。これらの前期古墳は、すでに消失してしまったり、盗掘を受けていたりなど、不明な点も少なくないが、一応、次のようなことが考えられる。

まず、古墳は長尾山丘陵・五月山丘陵・刀根山丘陵の北端と南端にわたって分布しており、少なくとも四つの地区に分散している。このことは、四世紀代、猪名川流域にはいまだ集中的な勢力は存在せず、三ないしは四の在地勢力が併存していたことになる。おそらくは、銅鐸の分布から類推しうる弥生時代の分散的な勢力が、古墳時代になってもそれほど大きく変化せずに継続したとみられる。そして、この分散的な勢力が個々に大和勢力と結んだところに、こうした前期古墳の点在という現象があらわれたと考えられている[40]。

また、前記した古墳のなかでも、早い時期に造営されたと思われる万籟山古墳と池田茶臼山古墳は、墳形、墳丘の規模・内部主体などに類似した点が多くみられ、ほぼ同時期に、同じような勢力をもつ二人の首長の墳墓と考えられる。これから、四世紀代においては、猪名川流域を一円的に支配する卓抜した勢力が存在していないことを示している。なお、この二古墳は、猪名川が突如として平野部に流れこむ地点の丘陵上に、猪名川を境にして東西に対峙するように造営されていることから、これらは猪名川と深いかかわりをもつ、つまり猪名川の水利用に成功した二人の首長の記念碑的存在とみられている[41]。

古墳時代中期になると、古墳は一定の地域内に造営されるようになり、古墳群を形成するようになる。猪名川西岸には、御願塚古墳[42]・大塚山古墳[43]・南清水古墳・池田山古墳[44]・御園古墳[45]という近接した五基の前方後円墳で構成された猪名野古墳群がある[46]。また、東岸には、現在は大石塚・小石塚など数基を残すにすぎないが、かっては三十六塚と称された桜塚古墳群[47]がある。五世紀代の猪名川流域は、西岸部は猪名野古墳群の被葬者たちによって、東岸部は桜塚古墳群の被葬者たちによって支配されたと考えてもよかろう。

以上、古墳時代前・中期における、猪名川流域の古墳を概説したが、この地域にあっては、中期になっても流域一帯を統合・支配するような卓抜した氏族が出現しなかったといえる。このような前・中期の古

墳のあり方からみて、猪名県における「県主支配の弱体性」[48]を指摘しうるかもしれない。

ところで、県主がその地方の有力氏族であり、それが古墳に反映すると考えられるのならば、猪名県主は猪名川流域のどの古墳の被葬者に相当するのだろうか。古墳時代前期の猪名川流域の有力氏族は、三ないし四あり、不明な点もあるが、ほぼ同じような勢力を保持していたと思われる。また、中期になると、猪名川流域は、東西の有力二氏族によって支配されたと考えられる。この両者は、古墳の数からみれば東部が有勢であり、前方後円墳を重視すれば西部が有勢であり、両者甲乙つけがたいといえる。すなわち、猪名川流域における代表的な一首長を、前・中期の古墳から指摘することは非常に困難である。

長山氏は、猪名県の中心は河辺群為奈郷にあり、猪名県主は為奈真人にとってかわられたとされている。[49]そうすれば、猪名野古墳群の被葬者こそ猪名県主にふさわしいといえるであろう。また、吉田氏も、猪名川流域の首長的古墳のありかたは複雑であり、地域政治勢力の隆替に関しては、単純な結論を許さないとされながら、おおむね長山氏の説を支持されている[50]ところから、同じように考えてもよかろう。

しかし、県のなかに同じような勢力をもつ二氏族がおり、一方が県主で、一方はそうではないとするには、若干の無理があるのではなかろうか。猪名野古墳群の被葬者を猪名県主であるとするならば、猪名県は河辺郡為奈郷を中心とする狭い範囲と考えるほうが自然である。だが、前記したように、猪名県は河辺・豊島両郡にまたがる広い範囲をさしていたと考えられる。このことから、古墳時代中期における猪名県主は、猪名野古墳群の被葬者と、桜塚古墳群の被葬者の「輪番制」であったか、または「複数制」であったとすべきではなかろうか。私は、古墳のありかたからみれば、後者、すなわち県主の「複数制」が妥当ではないかと思う。

「菟田下県」という記述からみて、県の範囲が広く、かつ複数の同じような勢力を有する氏族が併存していた場合、その地域には、上・下のような区域が存在したのではなかろうか。古墳時代中期における猪名県は、猪名川を境に、東西二人の県主が存在しており、中央からはともに猪名県主と呼ばれたと考えたい。なお、古墳時代前期には、三ないしは四人の猪名県主が存在していたと思われる。

猪名県は、その領域が広大であったためか、古墳時代中期にいたっても、県を一円的に支配する氏族が出現せず、東西のそれぞれの勢力によって県の支配がおこなわれてきた。弁天山古墳群の被葬者の後裔によりほぼ統一された三島県、かつ律令時代にいたっても地方官人として名を残す三島県主と比較すると、猪名県・猪名県主の「弱体性」はあきらかであろう。それゆえ、「五世紀代にすすめられたと考えられる渡来氏族を中心とする開発」[51]や新たな氏族の台頭によって、猪名県主は解体・衰亡したのであろう。

おわりに

以上、猪名県を中心に畿内の県についてみてきたが、能力不足はいかんともしがたく、支離滅裂になったところも少なくない。県制の研究が、いかに幅広いものであるか、いまさらながら気づいた次第である。

県制の研究のうえで、県の分布が大きな意味をもっていることは、上田氏の指摘以来、ほぼ定説化している。私は、とくに畿内における県の分布に注目し、畿内北部と南部に大きな差異のあることを述べた。

そして、この状態は、古墳時代よりも弥生時代後期の畿内を反映しているのではないかと考えたのである。ただ、弥生時代後期というと、「邪馬台国」との関連があり、意識的にさけることにした。今後の問題点としたい。

しかし、権力の所在は、やはり、首長墓たる古墳の出現をもってあきらかになる。すなわち、首長個人の「非生産的」建造物に、多大なる物資と労働力をついやすことにより、民衆とは隔絶した支配階級としての首長権が確定する。まして、一地域のわくをはるかに超越する大型前方後円墳は、過大に評価されてしかるべきと思う。私は、この大型前方後円墳の造営を契機に、県制が成立し、それをてこにして初期大和政権が確立したのではないかと考えてみた。

古墳時代における畿内に各地域は、おおむね県制によって統治されていたと思われるが畿内全域が県だったわけではない。県でなかった地域は、畿内北部に多く、そこにも前・中期古墳が存在する場合もあり、県制によらず中央政権とむすびついた在地勢力もあったことを示している。

古墳を手がかりとして、地方の情勢をみると、集中的な勢力により支配がおこなわれた地域もあるが、弥生時代以来の散在的な勢力が併存していた地域もある。猪名県は後者の例であり、古墳時代前期には三ないしは四、中期には二の勢力が併存しており、それらは古墳の規模・内容からみて、それほどの差異があったとは考えられない。すなわち、猪名県では、古墳時代前・中期をとおして、県全域を支配する集中的な勢力はあらわれなかったといえる。したがって、県の支配者たる県主をいずれの古墳の被葬者に比定すべきかは困難で、むしろ猪名県には複数の猪名県主が存在したのではなかろうかと考えた。また、猪名県主が史料に名を残さず解体・衰亡したのは、こうした「弱体性」によるものと思われる。

最後に、この論文が、長山氏のすぐれた研究によりながら、ほとんどそのわくをこえることができなかったことを反省するとともに、西摂地域の郷土史研究の一助になれば、私にとっては望外の喜びである。

〔注〕

① 新野直吉『研究史　国造』(吉川弘文館　昭和四九年)

② 吉田晶『日本古代国家成立史論』(東京大学出版会　昭和四八年)
県については、第五章、「県および県主」を参照されたい。

③ 長山泰孝「古代の尼崎」(『尼崎市史』第一巻　尼崎市役所　昭和四一年)
なお、亀田隆之氏も、『伊丹市史』第一巻で同じように解釈されている。

④ 巻第三、高市連黒人
吾妹子に猪名野は見せつ名次山角の松原いつか示さむ
巻第七、摂津作
しなが鳥猪名野を来れば有間山夕霧立ちぬ宿は無くて
一本に伝はく、猪名の浦廻を漕ぎ来れば

⑤ 『豊中市史』、『池田市史』、『箕面市史』、『伊丹市史』などがすでに公刊され、『尼崎市史』、

『宝塚市史』、『川西市史』が現在、継続して公刊されている。

⑥ 長山泰孝「猪名県と為奈真人」(地域史研究　第2巻第2号)

⑦ 鳥越憲三郎「為那国と勝部遺跡」(『勝部遺跡』　豊中市教育委員会　昭和四七年)では、この見解をとられている。

⑧ 渡辺久雄「伊丹地方の条里制」(『伊丹市史』第1巻　伊丹市役所　昭和四六年)

⑨ ⑧に同じ、また同じ『伊丹市史』第1巻の、亀田隆之「摂津地方の開発と大和朝廷の畿内支配」にも述べられている。

⑩ ⑥に同じ

⑪ 神戸新聞社社会部編『祖先のあしあと』Ⅲにおける赤松啓介氏の説
原島礼二『倭の五王とその前後』(塙書房　昭和四五年)

⑫ ⑥に同じ

⑬ 「九世紀以前郡司一覧表」(『古代の日本』9　角川書店　昭和四六年)による

⑭ ⑨の亀田氏の論文に、八・九世紀の猪名氏の一覧表がある。

⑮ 上田正昭「国県制の実態とその本質」(『日本古代国家成立史の研究』　青木書店　昭和三四年)

⑯ ②に同じ

⑰ 原島礼二「県の成立とその性格」(『日本古代王権の形成』　校倉書房　昭和五二年)

⑱ 上田氏は⑮で、畿内の県を第一次的なもの、辺境の県を第二次的なものとされ、その内容と性格について言及されている。

⑲ ⑮に同じ

⑳ 前期前半は前Ⅰ期、前期後半は前Ⅱ期と同じ時期である。
大塚初重「古墳の変遷」(『日本の考古学』古墳時代上　河出書房　昭和四一年)

㉑ ⑳に同じ

㉒ 北より手白香皇女陵(二二四メートル)、箸墓(二七八メートル)、桜井茶臼山古墳(二〇七メートル)、メスリ山古墳(二三〇メートル)

㉓ 井上光貞「国造制の成立」(史学雑誌　六〇の一一)

㉔ 小林行雄「同　鏡考」(『古墳時代の研究』　青木書店　昭和三六年)

㉕ ㉔に同じ

㉖ 野上丈助『摂津の古墳』(古美術鑑賞社　昭和四四年)に概説されている。

㉗ 『摂津万籟山古墳』(宝塚市教育委員会　昭和五〇年)

㉘ ㉗に同じ

㉙ 森浩一・石部正志「古墳文化の地域的特色　畿内およびその周辺」(『日本の考古学』古墳時代上　河出書房　昭和四一年)

㉚ 梅原末治「兵庫県下に於ける古代古墳の調査」(兵庫県史跡名勝天然紀念物調査報告二、大正一一年)

㉛ 佐原真「考古学からみた伊丹地方　弥生式時代」(『伊丹市史』第一巻　伊丹市役所　昭和四六年)

㉜ ㉛に同じ

㉝ 近藤義郎「古墳とはなにか」(『日本の考古学』古墳時代上　河出書房　昭和四一年)

㉞ ⑥に同じ

㉟ 梅原末治「摂津万籟山古墳」(『日本古文化研究報告』第四　昭和一二年)

㊱ 櫃本誠一「長尾山古墳外形測量調査報告」(『宝塚市文化財調査報告第一集』　昭和四六年)

㊲ 堅田直『池田市茶臼山古墳の研究』(大阪古文化研究会学報第一輯　昭和三九年)

㊳ 富田好久「古墳時代の池田」(『池田市史』史料編一　昭和四二年)

㊴ 藤沢一夫「古墳文化とその遺跡」(『豊中市史』本編一　昭和三五年)

㊵ 高井悌三郎「考古学からみた伊丹地方　古墳時代の伊丹」(『伊丹市史』第一巻　伊丹市役所　昭和四六年)

㊶ ㊲に同じ

㊷ ㊵に同じ

㊸ 梅原末治・小林行雄「園田村大塚山古墳とその遺物」(『兵庫県史蹟名勝天然紀念物調査報告』第一五輯　昭和一六年)

㊹ ㉚に同じ

㊺ 村川行弘「考古学からみた尼崎地方」(『尼崎市史』第一巻　尼崎市役所　昭和四一年)

㊻ なお、猪名川流域の旧海岸線沿いには、西摂最大の前方後円墳である伊居太古墳が存在しているが、その立地や主軸の方向からみて、猪名野古墳群とは別のものと考えられる。㊵参照

㊼ ㊴に同じ

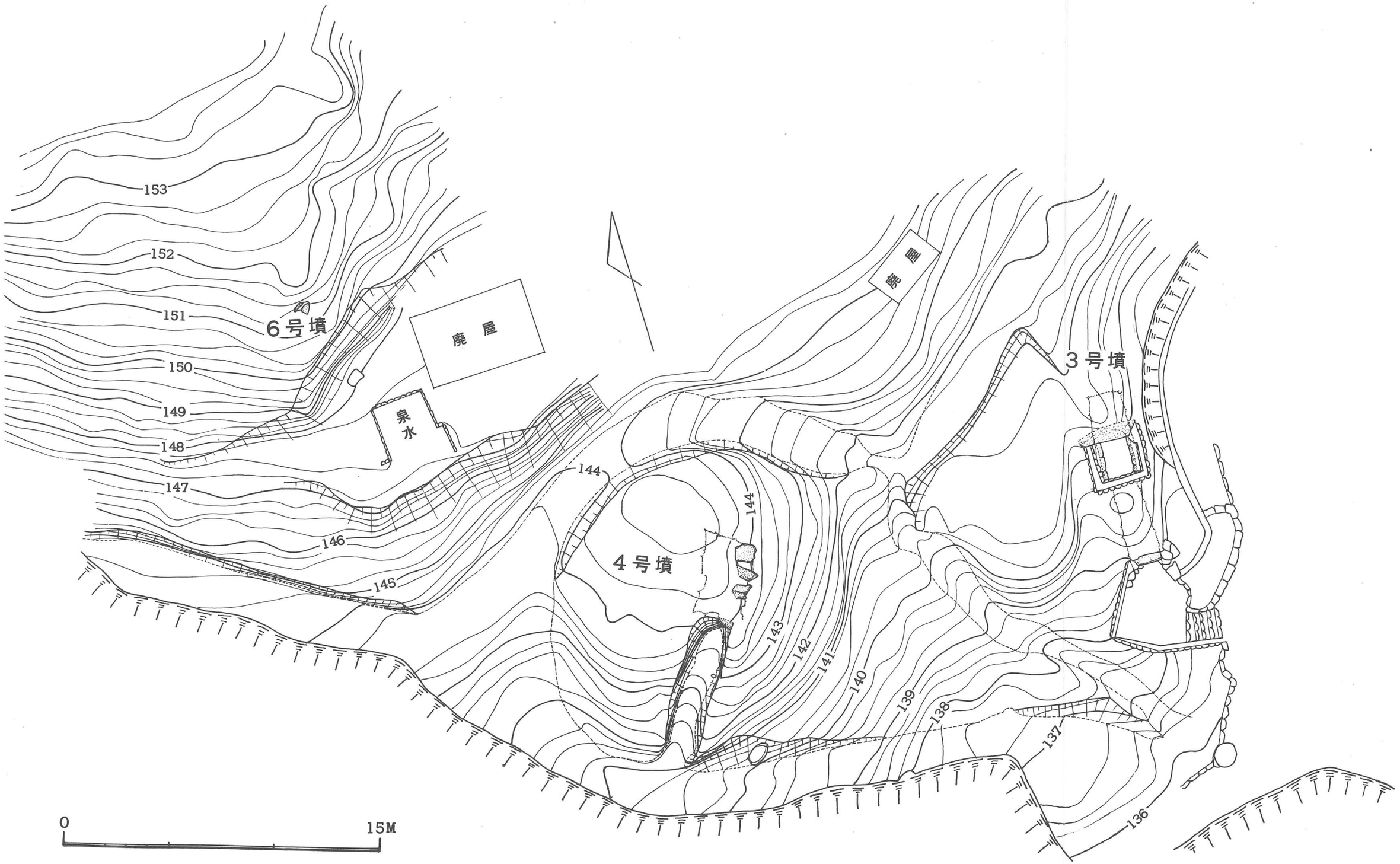
㊽ ⑥に同じ

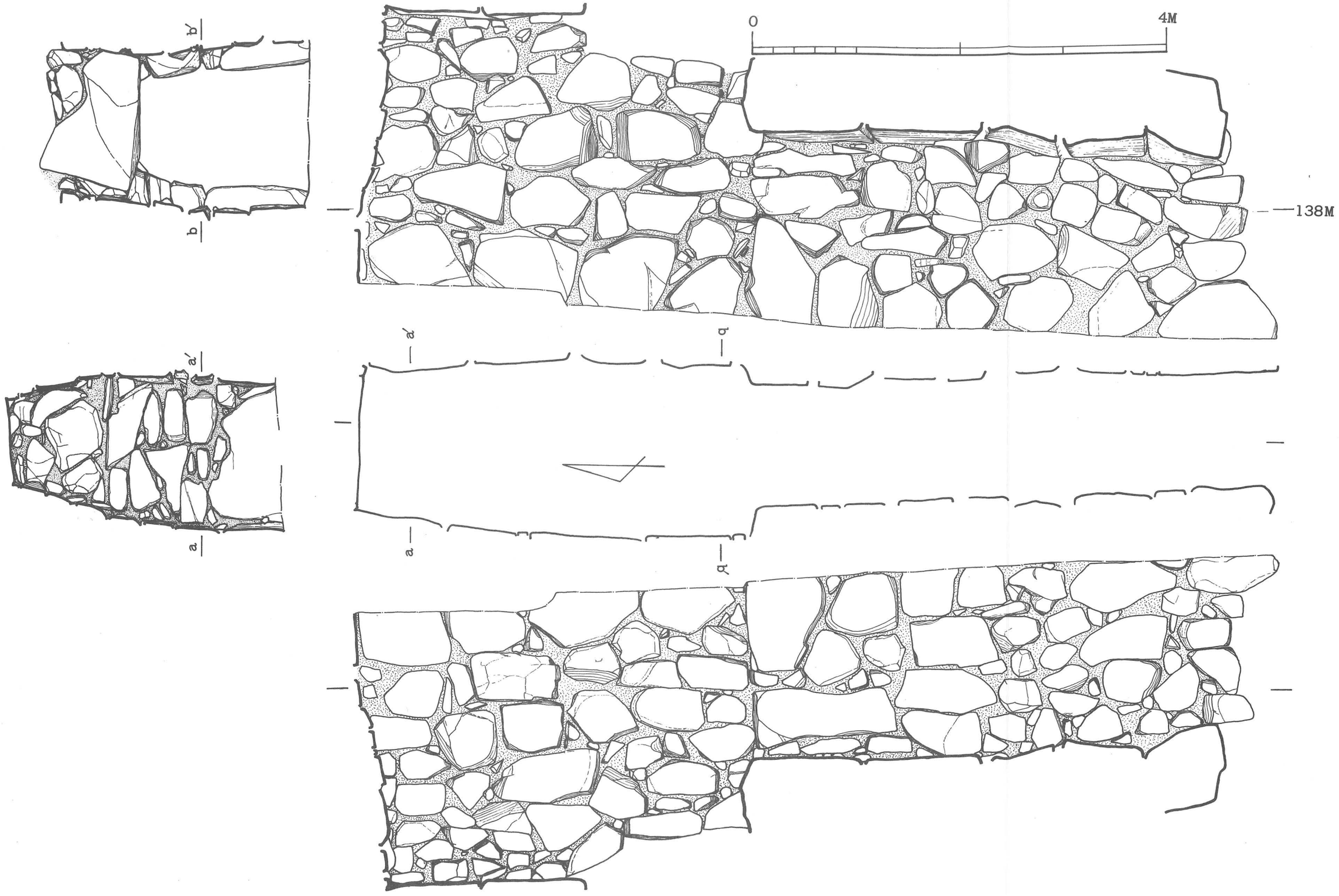
㊾ ⑥に同じ

㊿ ②に同じ

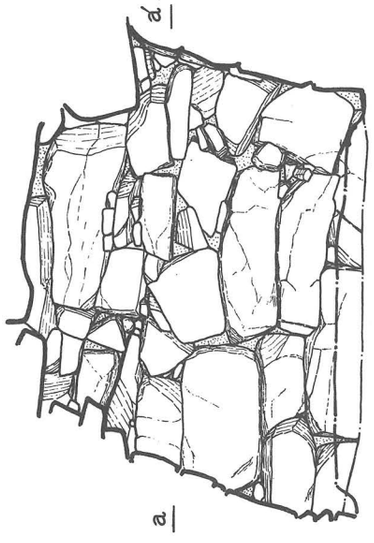
(51) ②に同じ

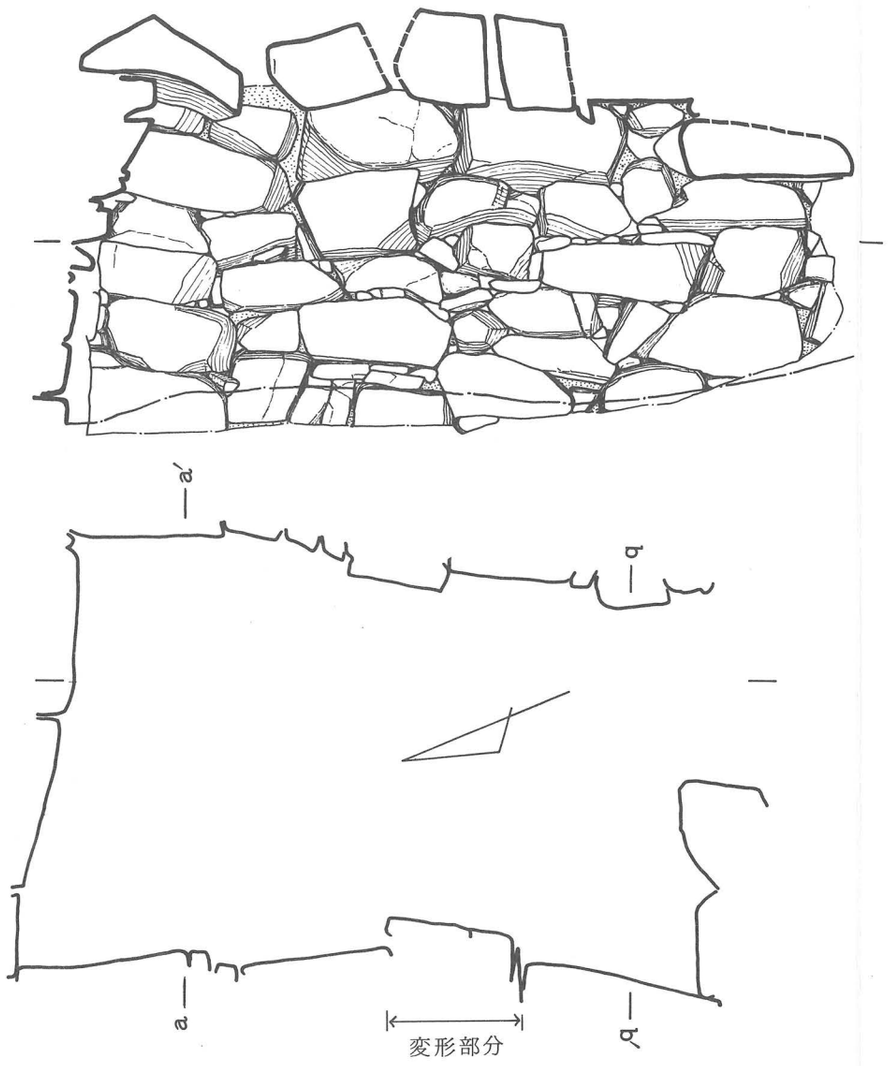
雲雀丘古墳群C北群3,4,6号墳　地形実測図

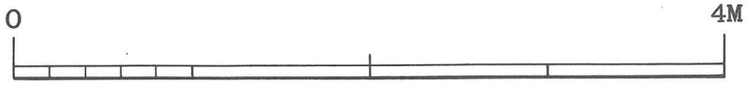




雲雀丘古墳群Ｃ北群３号墳　石室実測図　（石材の間隙にはすべてコンクリートが施されている）

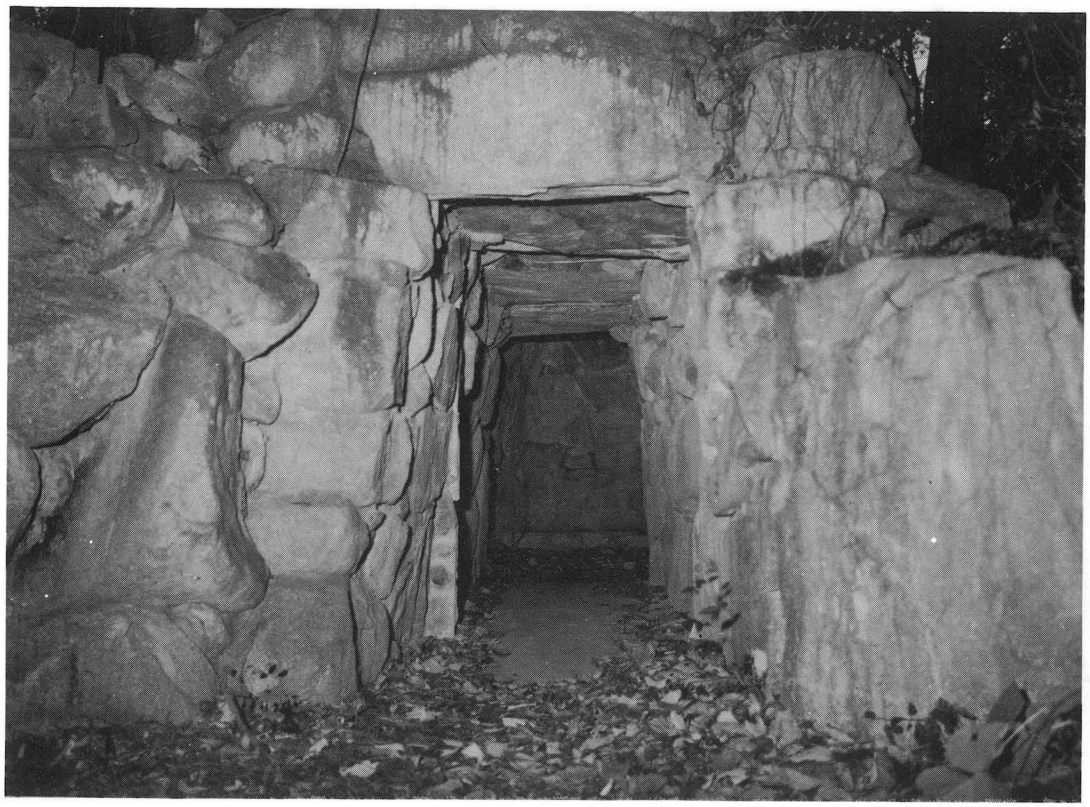






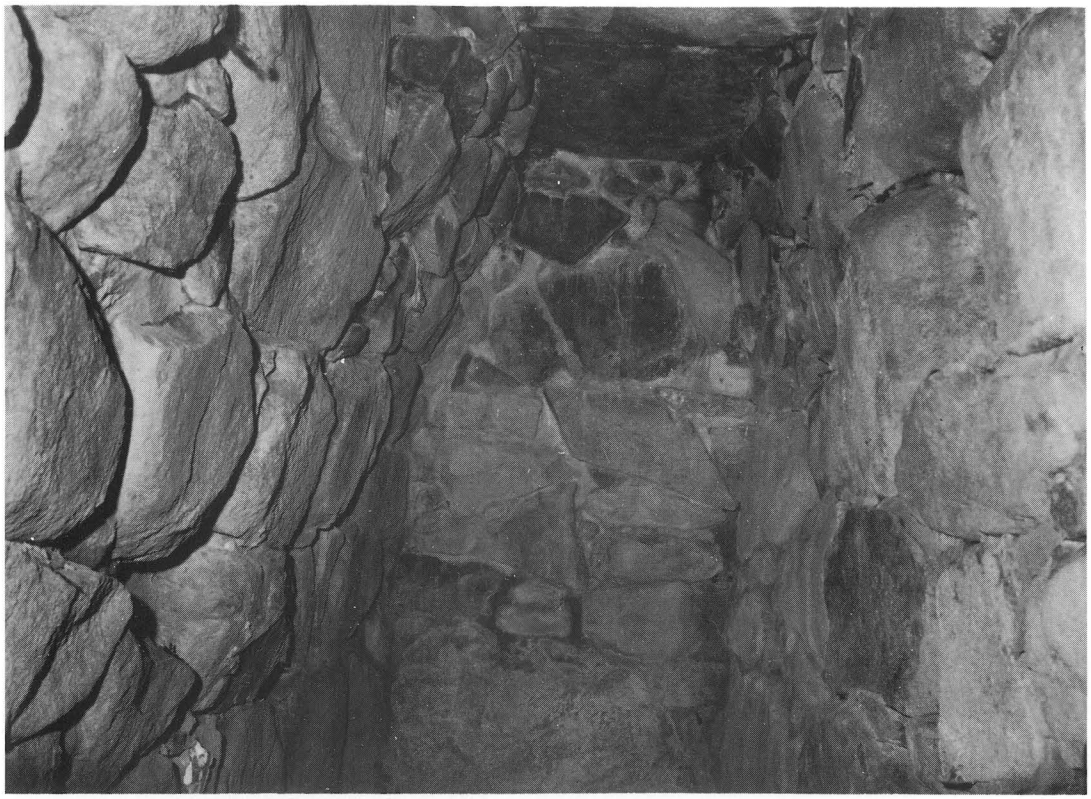
雲雀丘古墳群Ｃ北群４号墳　石室実測図

（１） 雲雀丘古墳群より南東方向を望む

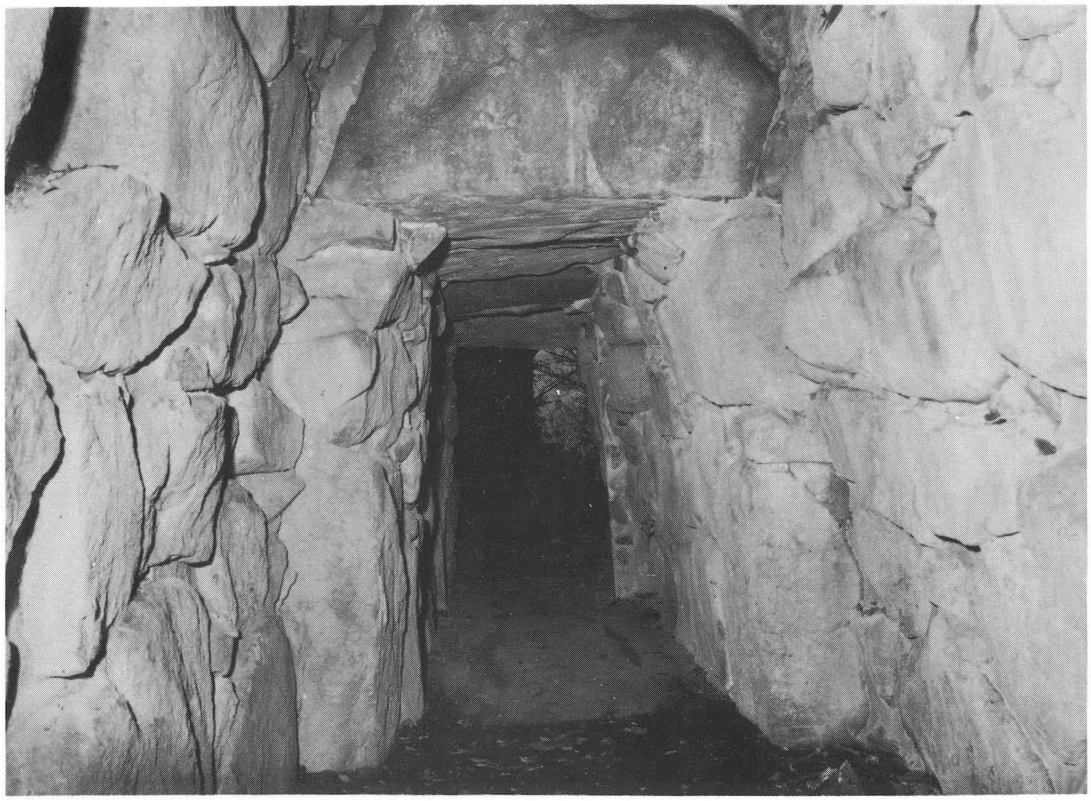


（２） 雲雀丘Ｃ北群３号墳石室前景

図版5　雲雀丘C北群3号墳

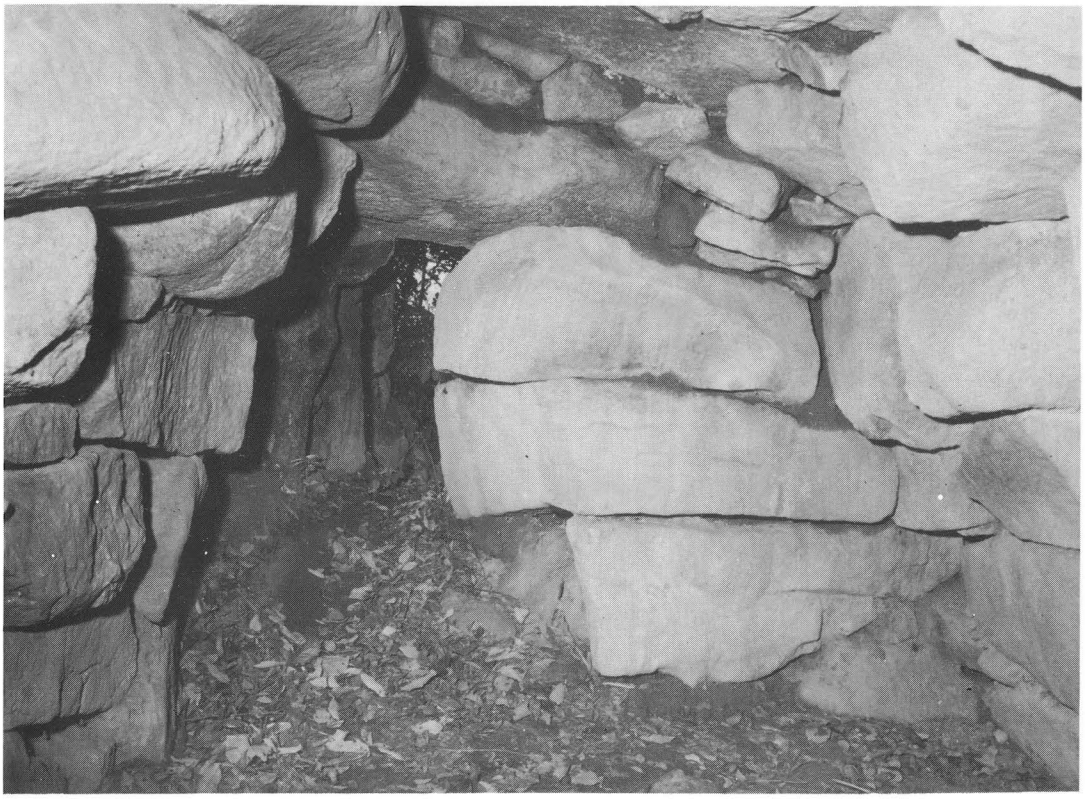


（1）石室内部（奥壁）



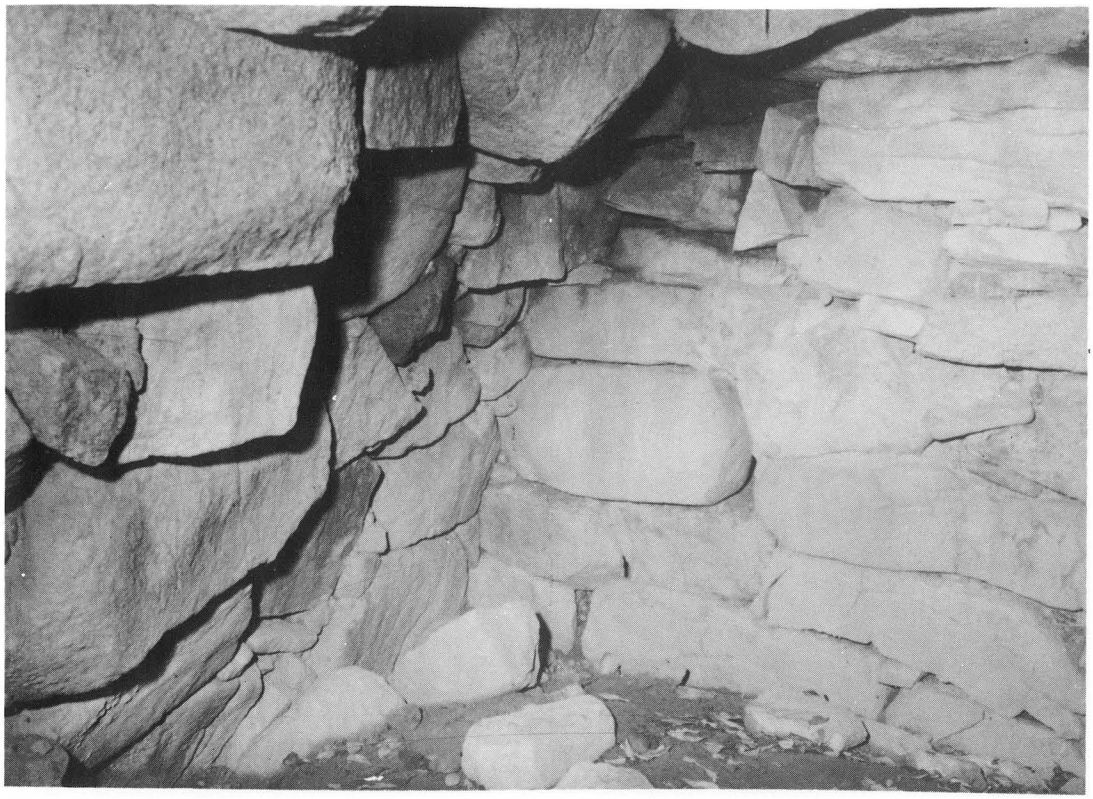
（2）石室内部（袖部）

（1）石室内部（奥壁）

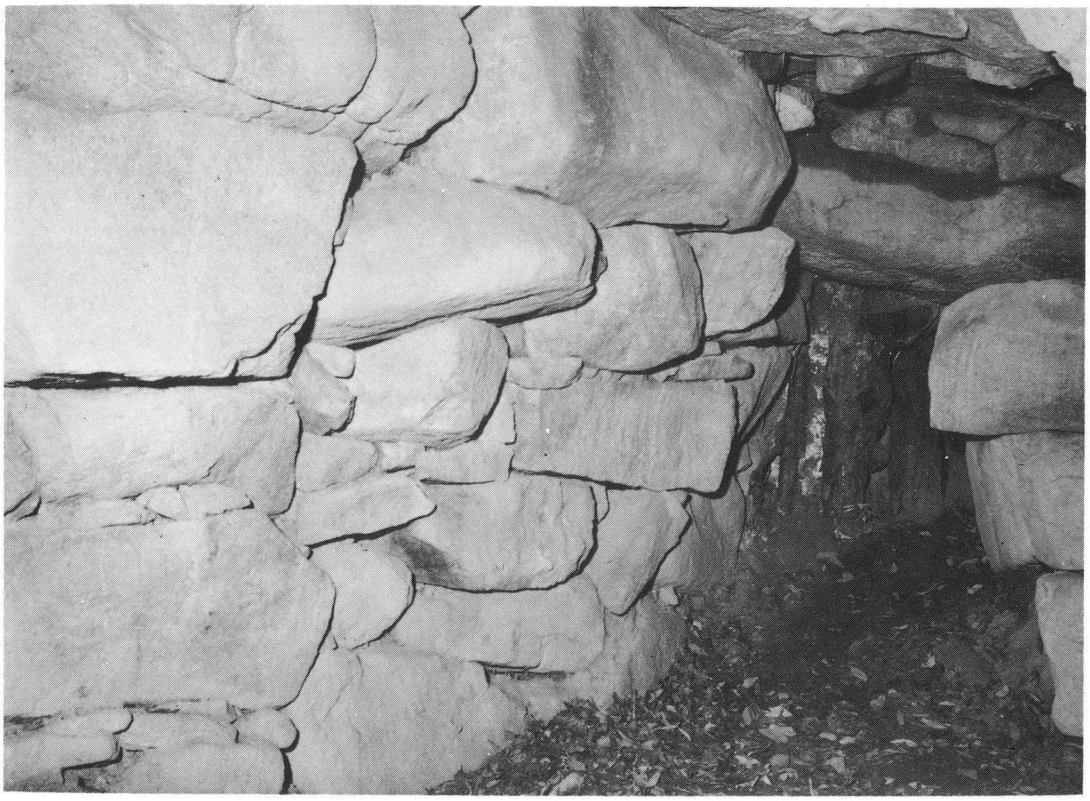


（2）石室内部（袖部）

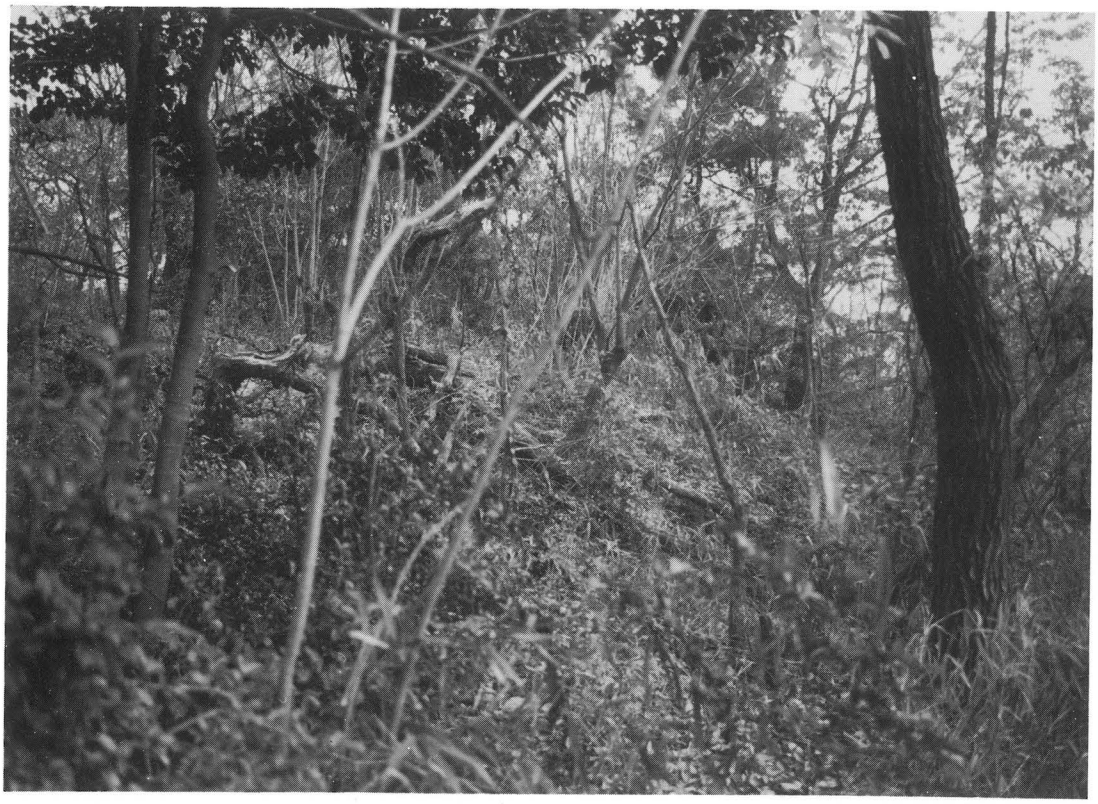
図版7　雲雀丘C北群4号墳



（1）石室内部（奥壁と西側壁）



（2）石室内部（東側壁）



（１）雲雀丘C北群４号墳墳丘（北より）

（２）雲雀丘C北群６号墳墳丘（南より）

編　集　後　記

☆　4号を刊行してから、ちょうど1年。1年1冊のペースを守れてまずは、ホッとしています。昭和51年以来続けてきた「長尾山の古墳群」の調査も、ようやく(Ⅱ)にたどりつきました。今回は前回(Ⅰ)の中筋山手古墳群から東へ3㎞、長尾山でも最も東に位置する雲雀丘古墳群までとび、C北群をまとめてみましたが、さて、内容はいかがなものでしょうか。

☆　考古学にたずさわる学生として、時間の許す限り長尾山丘陵に足を運んだわけでありますが、そのたびに丘陵に対する親しみもしだいに深まりました。反面、土地開発の波が押寄せ、長尾山丘陵が急速に変えられているのは淋しいことです。

☆　調査については、土地所有者である所別たかさんに、快く承諾していただき感謝いたします。また宝塚市教育委員会にはなにかと御世話をしていただきまして、ありがとうございました。

☆　今回は、研究会ＯＢ岡田氏（尼崎市教育委員会）に研究ノートを御寄稿していただきました。文献的存在である「県」が考古資料にいかに反映されているか、いかにも岡田氏らしい問題を西摂における「猪名県」をとりあげて検討を加えております。

関西学院考古購入御希望の方は郵便振込みにてお願いします。
関西学院大学考古学研究会　　会計係　土　谷　　恵
〒662　西宮市仁川百合野町４－17　池　田　方
振込番号　神戸４３１５１

顧　問　：福島　好和（文学部・助教授）
坂井　秀弥（院・１）・衣川　真澄（商・４）・今田　秀治（商・４）
中野　拓哉（法・３）・岡島　壮児（法・２）・高田　一雄（法・２）
三谷　重明（法・１）・納谷　守幸（文・１）・土谷　　恵（文・１）
浅原　聖庫（文・１）・中野　佳世（経・１）・松岡　俊幸（文・１）

関西学院考古　第５号
発　行　日　　昭和５４年３月１日
編集・発行　　関西学院大学考古学研究会
西宮市上ケ原　関西学院大学文学部内
（代表　　岡島　壮児）
印　　刷　　有限会社仁川印刷所